

# 報特攻

平成8年4月

第27号

〒105 東京都港区虎ノ門  
3-6-8 第6森ビル  
財団法人 特攻隊  
戦没者慰霊平和祈念協会  
電話 03(3432)1090

編集人 田中賢一  
発行人 木村元正

## 靖國神社公式参拝は

### 何故行われないのか

靖國神社で会おう」とは戦場に臨む者の合言葉のようなものだった。

「父に会い度くば靖國神社に来れ」とは御祭神の遺言によく見かける言葉である。我々は戦死したら当然靖國の神と祭られ、春秋の大祭には天皇陛下の御親拝を仰ぐものと心得ていた。全戦死者合祀のことだけは実現し、心ある国民の参拝は絶えないが、国民を代表する総理大臣の参拝は絶えて久しい。更に政府は天皇陛下の御親拝を仰ごうとしない。昭和天皇は昭和六十一年終戦の日に次の御製を賜った。

この年の この日にもまた 靖國のみやしらのことにうれいはふかし  
いつからそのような狂った世になつたのか、振り返ってみるに、

### 靖國神社公式参拝の戦後史

吉田首相は占領下であった昭和26年10月18日靖國神社に公の資格で参拝して、講和条約の成立を報告した。実はこれよりさき、占領軍総司令部は昭和21年10月1日「公葬等について」という指令を発し、公務員が戦没者の葬祭にかゝることを厳しく禁止した。しかし朝鮮戦争勃発等の情勢の変化に伴い、昭和26年9月10日に改めて「戦没者の葬祭等について」という指令を出し、先の指令を大幅に緩和した。吉田首相の靖國神社公式参拝はこのような状況下で行われたものだった。爾来吉田内閣から田中内閣まで、歴代首相は春秋の例大祭には公式参拝していてそれが当然のこととされてきた。

靖國神社国家護持の要望にこたえ、昭和44年以来審議されてきたいわゆる靖國法案は、同49年衆議院で採決されたが参議院で廃案となった。これをう

けて三木首相は「公私の別」なる妙な理屈をかかげ、昭和50年8月15日に靖國神社へ「私人として」参拝した。このときからマスコミが私的参拝か公式参拝かと愚な詮索をするようになる。その後歴代首相は私的という遁辞のもと参拝を続け、鈴木首相は「公私を語らず」と沈黙して参拝した。

次の中曽根首相に至り、「閣僚の靖國神社参拝問題に関する懇談会」を設け、その答申を受けて60年8月15日公式参拝に踏み切った。これで一件落着かと思つたが、中国から自国の国民感情を害するという内政干渉があり、政府はそれに屈し八月十五日だけでなく春秋の大祭への参拝も絶えて、今日に

及んでいる。

### 喫緊事は何か

一旦公式参拝が実現しそれが中断したのは一にも二にも隣国の干渉に屈伏したからに外ならない。細川首相の侵略戦争発言以来、隣国に頭を下げることが益々昂じてきた。一步譲ればやがて百歩も二百歩も譲らねばならぬ。しかも譲らせられるのは日本の精神である。靖國の御祭神と戦友だった我々の時代は過ぎ去ろうとしている。現下の要路の大官には、御祭神の面影は浮かんで来ないかも知れぬ。我々は生ある限りこのこと叫び続けねばならぬ。

### 目次

靖國神社公式参拝は	
何故行はれないのか	1
〔特集〕特撮2期②	2
知覧特攻観音へ奉納する仏像	13
観世音菩薩とは	14
特攻隊員の母の手記	15
海上挺進特別研究部の創設	18
英霊は語る	20
B-29の基地マリアナに	
対する陸海軍の経空攻撃①	21
会務報告	27



昭和天皇御親拝

## 特集 特操二期

②

### わが青春の日

魁会 野村 安平

現在ココロの仕事を東京でやっている京大出身の笈光正君と私が、神崎隊から最初に特別攻撃隊の要員として選ばれた。

あの日は確か終戦の年の3月26日と記憶している。あの日から終戦の8月15日、大分から二十分位離れた小さな飛行場のある三重という町で、終戦を迎えた数ヶ月間が、わが青春時代で、最も充実感を味い難い経験を積んだ尊い記録である。

折りにふれ当時を思い出すと、あの時代のこと走馬灯のように甦えってくる。

生にたいする執着と生甲斐のあった時代が他にあったろうか。死を惧れた数ヶ月の生活が、当時二十一才の私には長い訓練の歳月であった。

ふりかえれば、米沢工業の建築科を卒業すると、日頃柔道練習に生甲斐を感じていた当時の私は、拓大の武徳科

に籍をおき、毎日を柔道で過ごした。

大東亜戦争の戦局悪化は、兵役の延期を期待した私にこれを許さず、遂に昭和18年12月1日、学徒出陣の日が来た。群馬県の高崎歩兵部隊が私の原隊である。

木枯ふきすさび、粉雪のちらつく11月の末、山形県米沢の駅前に小旗を振って見送る隣組、縁者、友人の前で、私は、祖国日本の重大危機に一身を捧げ立派に戦うことを誓い、絶叫した。

牛が屠殺場に向うとき、直かんに死期の近づきを知る。大地に両手両足をふんばって、もの悲しく絶叫し、反抗する。牛は正直に己れの生きたいことを訴えるが、人間にはそれが出来ない。特に軍事教育のさ中に育まれた時代の青年にそれが許されない。心に死を拒みながらも牛になり切れず、祖国のため又一門の名誉という美名のために、当然死を覚悟しなければならなかった。後日私が、特攻隊志願するとき、楷書で立派に、熱願と書いた原因の一端がここにあった。

高崎の歩兵部隊の二ヶ月目に特別縦見習士官の試験に合格すると、ただちに相模の教育隊へ転属されて二ヶ月間のグライダー訓練をうけた。一刻も早く第一線で働かなければならない私

達は、超スピードで訓練をうけた。

館林飛行隊で赤トンボ、そして北支済南で、さきがけ会の諸兄等と蝗の大軍に驚きながら、草一本見当らぬ高い山のある飛行場で、双発高練の訓練をうけた。飛行技術が身につきはじめてのは、岐阜の各務原に帰って数ヶ月後である。

然し、3月の桜咲き競う26日の夕刻、私自身の耳を疑う運命の日がやって来た。

まさに死刑の宣告に等しい特攻隊要員の決定である。人一倍死を惧れ、臆病であると自認もしていた私にそれは思いがけない悲哀であった。周章狼狽、手足がわなわな震えた。多くの同僚諸兄の中から選りに選んで私に決定するとは、なんとという不運であろうか。

くじ運に弱い、めったに当ることのない私にこんな重大なことが簡単に当る。私に神も仏もないのだと思った。死を覚悟し祖国のために一身を賭して戦う筈の私に、特攻命令があつてなんの不思議がないのに、心の奥底には選にもれることを願っていたのである。その夜、私は毛布の中に顔を埋めて、声かみしめて泣いた。

特攻隊の志願の方法に三つあった。  
1. 熱願 2. 志願 3. 希望である。私

は熱願したのだ。

運命の神は、二十一才の私にと号八十六飛行機、第二編隊長を命じたのである。

特攻隊と決まれる戦友と湯上りの

躬をぬぐい 日暮れ語りぬ

これは同期の戦友中曾根君が私を詠んだ詩であるという。特攻隊要員として決定した私に同僚諸兄の温かい言葉と、ニガイ煙草の味が今もって忘れな

い。  
5月の末頃まで、新緑の各務原飛行場で、特攻訓練に明け暮れた。五〇度の急降下、そして地上スレスレの超低空飛行は、死ぬための訓練であった。急降下の失敗で地面に激突し、肉片となつて飛び散った十七才の少年飛行兵、藤田君の死は、特操二期生国分君等が夜間飛行の訓練中、第一旋回附近で墜落事故のため殉職した前後に起つた痛々しい記録である。B 29の本土爆撃は、名古屋を中心に岐阜・大垣を攻めた。P 51・グラマン F 6 F の艦載機による地上掃射は、個々の悲しみを語り合ういとまを与えない。夜空に手を合せ、亡き戦友の冥福を祈ることがせ一杯のことであった。

6月初旬、愈々本土防衛のと号作戦に出発するときが来た。日の丸を肩にかけ、水盃を交し、諸兄等に見送られ

三機毎の編隊で、九州に向かって離陸した。

僚機の誰もが練習機を青黒く塗り替え、二〇〇馬力のドラム缶を副座席に衝立て、三五〇馬力星型エンジンの異様な特攻機で、銃砲の炸裂する艦上に到底達することが出来るとは、考えていないのだ。只死ぬために行くのである。私は九州に着くと、筑後福島の宿舎で年老いた母あてに巻紙に遺書を書いて送った。

母上様  
特別攻撃隊の一員として只今、米艦粉砕のために出発いたします。

一度、米沢に帰り、母上様の後姿なりと、拝したいと思っておりましたが、その機会のないままお別れすることが残念です。

皇国に生を享け、二十有年、海山の御恩になりながら、この儘会わずにお別れしてしまうのは、誠に悲しく苦しいことです。二十有余年の歳月を一日として、私を想い出さぬ日とてない母上様の慈しみを考えると、死ぬなどと申上げるのは、親不孝の極みで御座います。

然し母上様 沈痛哀絶一魂空しく、幽冥に消えながら而も尚且つ、七度生れ来て皇国を護らんと誓ったのは、一人吉田松蔭のみではないのです。

腥風血雨幾春秋、栄ある新日本建設のため、幾多の先輩・英才達が貴き捨石として斃れました。われら若人の血潮の裡に皇国大生命のいぶきがかよわれていることを感じます。

母上様、私がわが家の前で誓いし言葉を思い出せますか、私が身を航空に捧げるとき、母上様はにっこり笑って激励してくれました。私の心は母上様が一番理解して下さいます。徒らに淋しがる母上様ではない筈です。不幸にして孝養らしいことをして来ませんでした。それが只一つの心残りです。然し大君の御楯として天が与えた苦難の一路をまっしぐら轟進するとき、大きな孝行を全うすることが出来ると信じます。幸に日夜の念願叶い、選抜されて特攻隊の栄誉を得ました。男子の本懐です。

嗚呼！皇国三千年の伝統の上に先輩達が相ついて打樹てきた尊皇攘夷の魂をあますところなく發揮して、世界の維新を成就すべき秋です。

憎むべき皇道の仇、米英を徹底的に粉砕し尽すまで私共青年は敢闘しなればならないのです。

母上様、私が死んでも決して力を落さぬよう、身は滅びても心はいつも米沢の地にあります。やさしく、強くそして今まで育ててく

れた母上様、どうか長生きして下さい。(原文のまま)

四国足摺岬の海上六〇〇軒地点に米戦艦五十八機動部隊が集結しているという。私共に与えられた任務は、これに特攻をかけることである。筑後の飛行場から大分県の三重町の特攻基地に移動したのは終戦四日前の8月11日の薄暮であった。二五〇K爆弾一個の取付を完了して、あとは特攻命令の待たせただけである。母にあれほどの覚悟を書き送った私が、もはやのがれようとして、のがれられないどたんばにきて、愈々観念したのである。死を懼れなくなったのはこの頃であったろう。九州の八月は暑かった。生きることをあきらめた私の目にうつる僚機の美しい着陸の影が脳裡につよくやきついている。

かん一発を境に、再び生をうけた私の第二の人生に、妻と二人の子供がいる。

当時の私の年になる子供等に、その心境を語るとしても、現在に生きる若人の心にどれほど理解されるだろうか。同じ環境のもとに勤労働員にかりたてられ戦争の酷さを知っている私の妻は、私の遺書のなかに、二十才の青春を、真剣にその日のために生きた姿をみて涙した。わが子が不幸にして同

じ運命にあるときを想像したに違いない。これが私の尊い青春の記録である。

## 手紙

知覧会 飯田 幸八郎

(渡部—旧姓江口—瑠璃子さんは、私が目達原第十一錬成飛行隊に在隊当時、人事係に勤務していたお嬢さんであつた。さすが同期生の考課表などをよく覚えてる。渡部さんが東京新聞から「特攻生き残りの人」について寄稿を求められたので、何かエピソードが欲しいという乞いに、拙文を送った。)

このところまた梅雨の戻りを思わせるような気鬱な毎日が続いています。今年は四十七年振りという再会が貴女で四人目でした。「みんな若い」と貴女がいうように、人生は思い出が鮮明なほど過去との距離が短いといえますね。二年に一回の総会で久闊を述べ合いますが、こんなことも老化防止の一助になっています。(中略)かれこれ半世紀も昔のこと、これだけは確かな記憶と自負していたことも、戦友との間ではまちまちで、特攻出撃も故障が多くて、何回か編成が乱れていること

は否めません。戦記の考証ではありませんからご海容お願いします。

・転属命令 昭和二十年四月四日、南国の陽光が営庭いっばいに降り注いで、満開を過ぎた桜の枝から残りの花がひらひらと掩体壕跡の池に舞い降りては静かな波紋を広げていた。戦争とは拘わりなく、自然が恵んでくれた麗らかな春の午後であった。壕跡の池で独り午休みの水浴を楽しんでいた私は

「空中勤務将校は直ちに将校集会所へ集まれ」の構内放送で我に返った。(中略)開隊記念日の行事がすんで旬日が過ぎると、第一陣の転属命令が下達されて、三月二十一日、太田澄夫・草間弘栄・捧金吉・玉置友哉の四名が常陸教導飛行師団へ転出して行った。来るべきものが来た、と決意を胸底に秘めて集会所前に整列、部隊長の命令伝達を聞いた。「下士官・兵であれば志願書を書いて貰うのであるが、諸氏は皇国陸軍の将校である」という意味の、山口部隊長の最後の言葉がいつまでも耳についていたのを覚えている。

(中略)

・特攻編成 第二次転属命令から格別の特攻編成が行われた。すでに、航空総監部では、三月二十日には第四十八〇第一一六振武隊の編成が整って、その実行が下達されていた(生田惇著

・陸軍航空特別攻撃隊史)こともあって、常陸十二名、明野二十五名の特攻要員が下命されたことはご存じの通りであった。赴任が決まって列車で久しぶりで見た地方の混乱と荒廃が予想を遙かに超えていたのに愕然とした。

(中略)着任の申告がすむと、直ちに特攻編成が下達された。全員第五十六振武隊である。四月といっても水戸はまだ春が浅くて、ローカルの小駅から四キロほどの田圃道を氷雨に濡れながら歩いたのがこたえたのか、夜になって熱が出た。医務室へ薬を貰いに行く

と四十度を超えた熱であった。「扁桃腺の熱だからたいしたことはないが、このまま貴様を飛行機に乗せたら何機あっても間に合わない」と軍医から即刻入室を命ぜられた。少しうとうとした夜半「飯田少尉おるか」と大きな声が、扉口に吹き込む北風に乗って室内に広がった。手をあげて合図をしようと「五十七期池田少尉だ。貴様、出身はどこだ」という。「そうか、大洗なら目と鼻の先だ、ご両親は健在か、それならなおさら一日でも親孝行して行けよ、明日の出撃は俺に委せる、俺は部隊長殿に頼んでくる」自分がいうだけ

のことを、一気に喋りまくると、私に訝る暇も与えず、まだ童顔に笑みを残して出て行ってしまった。翌朝、同期

の僚友たちが一人ずつ「あとから来いよ」と見舞いの言葉を投げて去って行った。我々の到着を待ち兼ねたように、運命は昨夜のうちに下っていたのだ(第五十六振武隊の沖繩突入は、五月六日(二十八日)。故陸軍大尉池田元威、一瞬の出会いであったが、彼の名も顔も五十六振武隊の同期生と共に終生忘れることはない。常陸でしばらく草間ほか先遣メンバーと共に少年飛行兵の教導に当たる。

・調布戦隊 五月に入ると、先の第一次要員四名と共に飛行第二四四戦隊(調布)への転属が決まり、第一六二振武隊を受命。着任早々の五月十八日、鹿島灘に来襲の機動部隊に対して、出撃用意の命令が伝えられたが、敵側の航跡不明のため作戦中止となる。(中略)散華したはずの小沢幸夫が、ふらりと演習中のピストに姿を現わしたのも、このころであった。愛機の故障で不時着、代機受領に来たという。「貴様、幽霊じゃないのか」とか

らかうと、「三重の実家でも同じことをいわれた。仏壇に俺の位牌が飾ってあったよ」と淋しげに笑った彼の姿も忘れられない(五月二十五日突入)。(中略)「戦争だけはつくづく運命を感じます」と、過日、箱根・環翠楼で梅村(旧渡辺)元区隊長が述懐してい

たが、いわゆるたった一つの番号が生死の別を決めてしまふ運命の非情に打ちのめされたのは、一緒に死のうと、隣に並んだ松原新との別れのときであった(第一五九振武隊。六月六日慶良間沖に突入)。臉を閉じると、今も五月二十八日の出発情景がはっきりと浮かんでくる。「本日の出撃は第一六〇振武隊までとする」命令を伝える小林戦隊長の声が青空の下で荘重に流れた。茫然とした一瞬が過ぎると、おろ

おろとこみあげてくる心の動揺を、私はただ黙って彼の大きな掌を握り締めること耐えるのが精いっぱいであった。「あとから征ぐぞ」の声も「万歳」も離陸の轟音にかき消されて、長いペトンの滑走路に打ち振る日の丸だけが小さくはためいていた。「松原少尉殿に面会です」と当番兵が連絡して来たのは、彼の機影がまだ南の空に一点残っていた時である。(中略)面会は、彼の父君とまだ女学生らしいお下げの令妹であった。父君の仙八氏は地元

の中学の校長で、連絡を受け取ると三浦三崎から夜を徹して急いだが、空襲警報に阻まれて間に合わなかったという。出発の報告を聞くと、息子のために持って来た落花生の大きなリュックを背負ったまま、べったりと宿舎の上り框にくず折れてしまった。ご高齢まで

ご存命を仄聞して、再会して彼の墓前に冥福を祈りたいと気にかかっていたが、悲しみを新たにすることにこちらが耐えられるだろうかと思ひ、機を逸してしまったのは残念である。この出撃を境にして沖繩特攻は終息したと戦記にある。沖繩が玉砕したからである。(中略) 7月某日、まだ本土決戦が残っていた。高度二〇〇〇メートルからの急降下訓練中愛機炎上、落下傘にて脱出降下。八月十三日最後の帰郷、肉親近隣へ秘かな訣別をする。夜に至り「全員帰隊せよ」の入電あり、八月十四日総攻撃のため都城へ集結すべく機体整備を急ぐ。午後、箱根・鈴鹿上空の気流悪化の情報に明日の出発を期す。八月十五日玉音放送を聞くため待機、終戦の詔勅下る。

エピソードといっても、目達原会は名簿を繰ると愛惜の思ひばかりで、明るい話題といったら、開隊記念の野球試合で凄腕を発揮した渡辺静が、元朝日軍のプロであったこと、双葉山の慰問相撲で、元横綱を土俵にぐらつかせた草間の柔道といったところかな。「靖国神社の社殿の東柱に錐で穴を開けて来た。俺が死んだらそこから酒を注いでくれ」と頼んで征った枝幹二の話は悲壮です。八十余名いた戦友の半数が沖繩で散りました。生き残った者

も、常に、戦友に出遅れたという潜在的な負い目に支配されて戦後を生きて来た、といえなくもありません。「戦争の思い出とは、きっぱり縁を切った」という人もいます。その気持も充分わかるし、五十年経って、集まっても、悲しみや、怒みや怒りも、過ぎた昔の思い出として、お互い懐かしく話し合えるのもまた男同士の世界だから、と思うのも年を取った証でしょうか。「青春を棒に振ったとは思わない。友情という、すばらしい宝を得たではないか」と、この前集まりで喋ったら、「同感」という大きな拍手が返って来ました。(平四・七月二十八日)

## 特別攻撃飛行隊員の

### 本音

金丸会 小杉久彌

特攻隊員は志願か、命令か

大東亜戦争終結後、早くも半世紀を迎え、当時大戦に従事、戦争を経験した者が少なくなった昨今、大戦末期に軍上層部が立案、編成した特別攻撃飛行隊について、その隊員は隊員の意思による志願か、あるいは上官の命令かについて、特別攻撃飛行隊を主題にし

た戦記等で、当時の戦争指導者であったと思われる一部の上級将校達は、特攻隊員は「志願であった」との意見の記述等を見聞するが、激烈なる状況下にあった当時の雰囲気にとけ込み、愛国心に燃えてごく一部志願した者がいたのは事実であるが、私が隊員を命じられた当時を回顧し、全員が本心から、あの自殺的行為とも思える特別攻撃隊員を志願したとは、私には到底考えられないことである。

軍部独裁の当時、責任感旺盛なごく一部の上級将校を除き、職業軍人で特攻を志願した者がいたかどうか、また率先垂範特攻出撃した者が何人いたか、敗戦色が濃厚になった戦争末期各戦線で、部下を置き去りにして、一番先以後方安全地帯に逃避し、後退したのは、彼ら戦争指導者であったことは、従軍した戦争体験者の多数が認めるところである。

私も特攻隊員を命ぜられ、数回出撃を体験し、また多くの特攻隊員に接し、彼らの出撃前の苦衷を垣間みるに、戦争指導者たちの発言を否定し、彼ら発言者たちに対し憤りを感じるものである。

そもそも我々学徒兵は、昭和18年12月1日、志願して入営したのではなく勅令により、学業半ばにして徴集さ

れ、半ば強制的に入営させられてしまったのである。私も徴兵検査で「甲種合格」と判定され、東部第六部隊(近衛歩兵第三聯隊)の歩兵砲中隊に入隊させられ、当時管内で禁止されていたはずの、古参兵が初年兵に対して行う「私的制裁」が平然と行われ、しごきの毎日であり、初年兵係古参兵の横暴なる振舞いに嫌悪し、苦痛の毎日であった。

私は子供のころより、大空を誰からも束縛されず、自分の技倆で自由に天翔ける航空兵に憧れていたため、徴兵検査の時、徴兵官から「希望兵科は」との質問に対し、躊躇することなく、即座に「陸軍航空」と応答した経緯もあり、航空隊への早期転属を急いでいた。そして、地上部隊生活二ヶ月余にして、念願であった、特別操縦見習士官二期生に採用されて、宇都宮陸軍飛行学校に入校、金丸原教育隊に配属され、内務に於ては種々問題があったが、中練の速成基本教育を五カ月余にして終了、台湾第二十一教育飛行隊(佳冬(彰化)に転属し、九七式戦闘機及び二式高等練習機による戦闘基本教育を五カ月余りで履修した。軍隊生活二年有余を今、回顧し、この五カ月余にわたる戦闘基本訓練時代がいちばん充実した、楽しい毎日であったの

で、今でも往時が懐かしく思い出される。

暗黙の裡、特攻隊員になる

戦闘基本訓練を無事終了し、いざ戦隊へと、期待に胸ときめかせていたところ、意に反し、第三錬成飛行隊（二式復座戦闘機・屠龍）の、第二期錬成要員として、特操同期生三十余名とともに転属、双発高練の地上滑走訓練からの新規やりなおしで、今までの戦闘基本訓練五カ月余はなんだったのか、当時内地では松木を伐採し、その根から油を絞る、ガソリンの代用にしていたくらいガソリンは欠乏し、「血の一滴」ともいわれ、貴重品であった燃料の無駄使いではなかったのか、私は師団の杜撰な訓練計画に疑問を抱いた。双発高練の訓練十日余りにして逐次、二式複戦の訓練に移り、甲乙二班に分され、早期単独飛行に移行した。尉官、特操二期及び少飛十四期生の上位各五名が乙班に編入、私もその一員に選ばれ、彰化飛行場の本隊から離れ、隣接する鹿港飛行場を占有し、毎日晝暁と薄暮の飛行訓練に専念し、高度二〇〇〇メートルから地上の丁字型布板に向かつての急降下訓練に終始し、どうも特攻隊要員に編入されたいとの、隊員間の噂を耳にし、私は愕然とした。

しかし、今だから言えるが、当時、私は特攻隊員になるなど夢想もせず、

万一特攻編成が下命されても妻帯者や長男は除外されるらしいとの噂もあり、俺は一人息子であるから死ぬわけにはゆかない、絶対生きて帰るんだ、と心に誓っていた。また、万一下命されるとしてもいちばん後で、その時まで飛べる飛行機が残っているかどうか、おそらく飛行機及び燃料とも、内地からの補充は途絶し、特攻作戦は中止になるだろうと希望的観測をしておいた。

特攻隊員に参加させられる

3月中旬、部隊本部から空中勤務者全員に対し、「重大なる戦局に直面し、いつ師団から特攻出撃の下命あるかも知れず、その準備として、特攻隊員を希望するか、否や、「その有無」を書面で提出せよ」との命令が突然あり、一瞬舎内が肅然となり、同期生同士がお互いに顔を見合わせ、いよいよ来るべき時が来たかと、頷き合った。そして、本隊の甲班で二式複戦の訓練にやっと移行したばかりで、早期出撃の可能性が薄いと思われる一部の者は、「よし、俺は熱望と書く」と戦友を鼓舞するためか、勇ましい者もいたが、果たして本心からの発言かどうか、私は疑問に思っていた。

私は正直なところ、空中戦で戦死するなら自分の技術未熟と諦めもつく

が、自分から爆弾諸共に体当たりする特攻なんて、狂気の沙汰とも思える自殺的行為の作戦に自分から進んで参加する気持ちなど全くなかった。

しかし、本部ではすでに、鹿港飛行場で移動訓練中の者は全員、特攻要員を前提に乙班を編成したらしく、休日でもないのに、突然休暇を与えたり、甲班とは若干扱いが異なり、また、整備兵達の我々に対する態度も、なんとなく丁重になり、特攻要員であることを感じ取っていたらしい。

このような環境下において、今さら、「希望せず」と、書く勇氣もなく、暫し思い悩んだ末、意に反し、「希望」と書いて提出してしまっただが、その後の毎日は、いつ特攻を下命されるか、そのことばかり考え、不安な毎日を送ることになってしまった。

しかし、戦後戦友から聞くところによれば、当時の環境下では内心はともあれ、大多数の空中勤務者は、「希望」と書かざるを得なかった、との本音を聞いた。

なお、愛国心に燃えた純情なる少年飛行兵出身の丁軍曹は、血書で志願したと聞いたが、その一方、古参の勇氣のある〇軍曹は、「希望せず」と書いた

ため、即刻他の部隊に転属させられたのも事実である。

昭和20年3月23日、ついに、わが部隊に対し、第一次攻撃隊の下命があり、誠第一一四攻撃飛行隊員十五名（第一期錬成要員八名、第二期錬成要員七名）が下命され、その一員として、金丸原教育隊時代同寢室であった矢作一郎少尉と私の二名が含まれていたが、幸か不幸か、私は三日前より医務室に入室中で、すでに、軍医から、台中の陸軍病院に入院を命ぜられており、特攻下命を知らずに台中に向かつて出発した。途中車内で随伴した衛生兵から、少尉殿も特攻隊員と下命されていましたよ、と知らされ、愕然としたが、今さら入院を止めるわけにもゆかず、予定通り入院したが、この間、特攻隊員十四名は彰化より桃園に進出後宮古島に前進し、出撃下命を待機していたと聞く。私は、間一髪のところまで出撃を逃れ、正直なところ内心ホッとしました。

約一カ月後に退院、戦友から同期の矢作少尉他十名がすでに久米島海域の敵艦船に体当たりして戦死し、二階級特進したと聞かされ、「貴様は運の悪いやつだ」と言われたが、戦友は本心から運の悪いやつだと思っただのかどうか、私は内心、俺は運が良かった

と置いていたので、複雑な心境であったことを思い出す。

退院した当日、誠第一二三特別攻撃隊員を下命（この隊は誠第一一四及び一一九特別攻撃隊員で、出撃当日離陸に失敗または、機体の不調等で出撃できず、生き残った者で編成）台湾東部に接近中の敵機動部隊を攻撃する予定で、出撃下命待機を命ぜられていたところ、5月16日、部隊の首脳部はなに

を血迷ったのか、我々より飛行経験の豊富な、第一期錬成要員が多数いるのに、生き残った我々を、どうしても死なせなければいけないのか？

洋上航法や夜間飛行訓練をしたこともなく、場周離着陸と、急降下しかできない技術未熟な私と、同期、都築少尉及び神原少尉（幹候八期第一期錬成要員）の三名に対し、飛行第二十九戦隊が編成する四式戦（疾風）三編隊の「誘導戦果確認兼特攻」を下命、我々三名は、死を宣告されてしまった。

5月17日、我々三名は桃園飛行場から台中飛行場に前進したが、いよいよこれから死の旅路につくのだからという悲壮感や切迫感はなく、今考えると不思議に思うくらい、平然としておったことを思い出す。

5月21日、第一次攻撃隊四機に対し、薄暮攻撃が下命され、先任である

神原少尉が当たることになったが、誘導機の出発準備が、出発予定時刻までにできず、師団参謀は無謀にも、特攻機四機だけの、単独出撃を部隊長に命じ、部隊長はやむなく出撃させたため、特攻機が果たして、目標に到達し、攻撃が成功したかどうか、戦果未確認のいたましい結果に終わってしまった。

翌22日、第二次攻撃隊の出撃が下命され、前日、出遅れ出撃できなかった神原少尉が出撃すると思っていたところ、戦闘指揮所に入る寸前、神原少尉から「小杉、今日は貴様行け」と指名され啞然とした。

なお、第二次攻撃隊の隊員は、私より飛行経験の多い先輩である特操一期生二名と、少年飛行兵十三期二名が操縦する四式戦四機を誘導することになったが、燃料満載の上、落トタンク及び二五〇キロ爆弾を搭載し、初めての離陸、そして洋上飛行であり、はたして目標の沖繩に辿り着くことができずともか内心不安で、私の方が誘導してもらいたいと思った。

出発に先立ち戦隊長から「沖繩方面の天候についての情報はなく、不明であるが、成功を祈る。なお途中、一機でも故障機が発生した場合、即刻全機、帰投せよ」との指示を受け離陸出

発したが、数時間後に特攻隊員の最後を見届けた後、自分が突入する目標敵艦船種を打電し、死ぬというのに、死ぬ気は全く感ぜず、自分でも不思議に思うくらい冷静であった。

台中飛行場離陸後、約一時間余りで尖閣諸島の魚釣島上空を通過後、突然、隊長機が急接近し、エンジン不調の合図とともに、二五〇キロ爆弾を海上に投棄して反転、わが誘導機より先に四機とも台中に帰還してしまった。

翌日、再度出撃が下命され、昨日と同じ編成で出撃したが、魚釣島を目前にして、またもや一機が油圧系統に異常ありの合図後、早々に四機とも反転し、帰還してしまい、私は爆弾を装着したまま台中に帰還したが、なんとも後味の悪い攻撃失敗に終わってしまった。

5月31日、第三回目の出撃を下命され、前回と同じ編成で、出撃することになったが、今回は「乙編成」に変わり、誘導機の特攻が解除され、「誘導戦果確認報告後速やかに離脱し、近接飛行場に着陸せよ」との命により、従来より四〇〇リットル燃料を増載することになり、後方同乗者席を取り除き、そこに即製の増槽タンクを積み込んだため、同乗見習士官は、そのタンクの上に馬乗り状態で長時間飛行する

ことになった。

16時30分予定通り離陸、魚釣島上空を通過後、敵戦闘機の迎撃を警戒しつつ進行し、目的地に到着するまで敵機に遭遇さえしなければ、何とか生還できる一縷の望みが湧くと同時に、生に対する執着の念が強く起き、敵の迎撃機に遭遇しないよう心の中で神仏に祈った。

やがて、久米島前方約二〇〇キロ付近まで進行したところ、優勢なる積乱雲に行く手を阻まれてしまい、特攻機の積載燃料を考えた場合迂回することもできず、雲下飛行を試み、五分ぐらい飛行後、後方席同乗の機上無線係、古川見習士官から「特攻機が見えなくなりました」と連絡があり、離散した特攻機を探す術もなく、やむなく帰還することを決意し、その旨を台中基地に打電させ帰路についた。

途中、桃園飛行場上空で日が没し、初めての夜間飛行を経験することになったが、無事台中飛行場に辿りつき、本来脚保護のため二五〇キロ爆弾は海上に投棄して着陸すべきところ、前日も経験しているので無謀にも離陸時のままの姿で着陸したため、機付整備兵が驚嘆しておったことを思い出す。

なお、翌日戦闘指揮所で聞くところ

によれば、離散した特攻機は四機とも、台湾の北端にある宜蘭飛行場に不時着し、四機とも大破し、以後作戦続行が不可能になったことを知った。

従って、我々への命令は解除され、三名は桃園飛行場の原隊に復帰することになった。

當時を回顧し、今だから言えるが、出撃途中特攻機が二回続いて故障をおこしたのはなぜか、特攻出撃の場合、長時間飛行するので、整備隊は念入りに、万全なる整備をしている筈であり、整備不良による故障が偶然続いたのか？

・ 出発前の部隊長の含みある指示の影響か？

・ 故障機は、故障と言いながら途中近くの飛行場に不時着することなく、一時間以上の飛行に耐え、よくも台中飛行場に着陸できた？

・ 三次出撃途中、雲中で離散したはずの特攻機が、四機揃って、同一飛行場に不時着できたのはなぜか、偶然か意図的か？

当時の特攻機の行動について、私は今もって謎に思っている。

しかし、このお陰で、私は突入することもなく生還、命拾いをして今日まで生き、平和な生活ができたのであるから、私にとっては四人の特攻隊員は

命の恩人であり、今さら究明して真実を知ろうとは毛頭思っていない。

### 戦争指導者たちの欺瞞

師団参謀部とは、有能な人の集団と  
思うが、私が台中及び八塊飛行場に前進中に会った若い参謀達は、特攻出撃毎に台北の司令部から、下士官が操縦する高練に同乗「恩賜のタバコと神酒

一本」を、恭しく持参して来たが、出撃特攻隊員に対し、一言の激励する言葉をかけるわけでもなく、毎回、戦隊長の横で隊員を見詰めているだけで、何のため台北から出張して来たのか、単なる儀式のため、タバコと清酒を持参するのなら、貴重な燃料の無駄使いではないか、と思った。また、わが機付整備下士官が、参謀を乗せてきた下士官から聞いたところによると、同参謀は中練の基本教育しか受けず、操縦適正に欠け、血沈組に等しい技倆と聞き、私は啞然とした。

このように、実用機の訓練もせず、もちろん実践の経験もない、戦争指導者である一部の参謀達が、机上で立案企画したあの狂気とも思われる作戦命令に、我々は従わされ、消耗品扱いにしておきながら、特攻隊員は全員「本人が希望し、喜んで突入、散っていった」などと言うのは、彼らの保身のための欺瞞で、自分達の立案した、あの

狂気じみた特攻作戦を正当化させ、さらに特攻を美化させるためで、特攻戦死者を冒瀆するものではないかと、私は思う。

当時、戦争指導者達上官の命令は絶対的であり、我々はただ、命ぜられるまま出撃するしかなかった哀れな存在であった。

そして、無残にも沖繩の海に、青春を散らせてしまった、若い特別攻撃飛行隊員の、下命出撃時の苦衷を察するに余りあり、胸の痛む昨今である。しかし、若い特攻隊員の死は決して無駄死にはなく、今日の平和国家に生まれ変わるための先導役として、尊い犠牲になられ、平和日本の礎となられたのだと、私は確信している。

私も学徒兵の一員として入隊させられ、選ばれて特別攻撃飛行隊員を命ぜられ、再三出撃させられたが、特攻機の故障により攻撃失敗に終わったため、幸運にも九死に一生を得て今日に至ったが、戦後早くも半世紀を経過し、戦争体験者が少なくなった現在、当時、特攻出撃した隊員たちの心底はどうであったか、その真実を今知る術もなく、特攻が風化しつつある昨今、当時数多くの特攻出撃隊員に接し、私が見た隊員たちの苦衷の一端と併せて、私が特攻出撃を体験した、出撃前

後の心境の一端を思い出すまま羅列し、狂気とも思える特攻作戦を立案・命令した戦争指導者等の欺瞞に満ちた無責任なる発言に対し、私は異議を唱えるものである。

## 八日市・鉾田から

### 那須野まで

二八会 樋口 政市

我々特操二期生が召集尉官と共に八日市から鉾田の地を踏んだのは、たしか昭和19年11月末であった。我々は、陸軍最初の特別攻撃隊として比島へ進発した萬葉隊、八紘隊の後を受けて第四次補充要員となっており、いよいよ来るべき所へ来たという実感がわいた。考えれば熊谷陸軍飛行学校相模でグライダーの特訓、館林では赤とんぼによる各種訓練、八日市では双発高練による各種操縦演習等を経て、在隊終期には「特攻隊を志願する者は一歩前へ」ということになり、我々二期生の身分は決まった。一年余の教育訓練でこうも変わるものかとわれながら考えられない人間変革を遂げた。

鉾田の地は、太平洋を挟んで米本土と相對し、攻防待ったなしの場所である。戦局はサイパン陥落以来、一段と

激しい変化を見せ、日本のほとんどはB 29の爆撃圏内に入り、全国の主要都市は風前の灯ともいわれる情況下におかれた。銚田教導飛行師団は今西六郎中将が師団長として指揮を執っており、時おり将校集会所で部下の誰かと対局している姿を見た。今西閣下には美人の令嬢がおり、この師団の幹部、

山崎大尉と結婚しているとのこと、隊内でも話題であつたらしい。山崎大尉の印象が今でも鮮明なのはなぜか。それは彼がハンサムであり、軍人としてのエリートコースにもつていたことである。そして操縦技術が卓越していた、などがその故であつた。が、それにもましての記憶は、我々が着任して早々にこの部隊で殉職者が出た。そしてその葬儀の委員を彼が執行して弔辞をのべた。一月末の寒い飛行場でのことであつた。

さらにその翌々日の31日、我々はキ45による夜間離着陸の猛訓練を厳寒をうけて実施していた。大尉は愛機を駆使して陣頭に立っていた。順番がきたのか淡々と機上の人となり、鹿島灘へ向かつて飛び立った。ところが左へ旋回しなければならぬタイミングなのに搭乗機からの標示灯が見えない。直進するはずはないのだが、山崎機はそのまま姿を没してしまった。地上の演

習参加者は大騒ぎとなつた。第一旋回地点に達するまでになんらかの故障が起きたことは疑う余地がなかった。海上一面は闇である。搜索は直に始められたがその具体的なことは聞かないままに葬儀に列した。空に生きるものの悲愴な最後をそこに見た。

二日前に部下の葬儀を執行し、二日後に自分がその後を追おうとは。二月の寒さに入った鹿島灘の海底深く、愛機と共に。まさに悲痛の一語である。このようなことがあつてから銚田には、水戸への艦砲射撃、師団施設への激しい空襲など、急を要する環境立地上の不利が出てきた。銚子東方海上には米機動部隊があつて大胆な行動に出てきた。これは日本の本土防衛能力の低下と、米軍の攻撃能力の増大を物語るものである。我々は一日として枕を高くして横になることは許されなくなつた。上層部の協議判断で急遽立案された作戦は、銚田へは防空戦隊のみを残し、特攻要員とその関係部隊は、速やかに那須の飛行場へ移動する、ということであつた。着隊以後四か月に満たなかつたが。

岩本大尉ら萬葉隊将校の比島での悲劇、山崎大尉らの痛ましい殉職、米軍機による格納庫二棟・飛行機六機の炎上、宿舎への被弾、銚田上空五千メー

トルでの空中戦とキ45の邀撃戦、ロケット戦法といわれる二機コンビの挟撃戦の実体、鹿島灘に撃墜された米パイロットを護送するグラマンの不敵な姿（戦友愛か、米潜艦が収容）など、僅かの間の思い出が限りなく多い。

八日市ですでに特攻志願者となつてゐる我々には、銚田でキ45による慣熟訓練を受け、飛行時間の増加と練度の向上により一人前の空中戦士としてお役に立てる日が確実に近づいていることは間違ひなかつた。我々はすでに帝國陸軍の新品将校として任官してゐた。

部隊は追われるように銚田から那須へと移つた。この那須野原には皇室の御用邸があり、黒磯駅はその特別駅でもある。さて黒磯へはきたものの落ち着く宿舎がない。小さな町なので数百人の部隊人口を収容する余地がない。召集尉官や我々は駅前にあるバス会社の三階に仮泊することとなつた。那須野の春は遅い。この三階は何の飾り気もなく寒々とした殺風景な通し部屋で、しかも雑魚寝である。これでは猛者の将校さんも士気が昂揚しない。夜具は毛布一色である。喫煙者も多いので火災でも起きたら大変と隣の高木さんから竹製急造の灰皿を沢山贈られた。崇高な使命に赴こうとしている純

情な張切り少尉さんも哀れなものである。

さっそく一同はそれぞれに宿探しを始めた。目に入る民家はすでに先着者によって契約されており、自分は百村（もむら）通りの渡辺という畳屋の二階を借りることにした。家は古く二階の二部屋であつたが、家族は皆、人のよい一家であつた。遠望する那須岳は静かに音もなく白煙を吐いていた。

「我が胸の燃ゆる思ひに比ぶれば 煙はうすし桜島山」平野国臣の句を想起して僅かな感傷に浸つたり。その間、師団人事も大きく動いて、高品朋少将が今西中将に代わり、高級参謀も土井勤中佐となつた。二人とも南方帰りときかされた。演習教育の長には稲垣少佐、三浦大尉らがついて、どの飛行機も自由自在といったところ。陸士転科という五十七期生とはここで初めて会い、四月特攻編成で混合した。

操縦は五十七期と召集尉官、それに我々特操二期、通信は特操三期、少飛兵で組み、各隊は六機（屠龍）八名（内通信二名）と決まつた。部隊は召集尉官に遠慮してか隊長の発令をのばしていたが、4月に五十七期は全員中尉に進級したのでさっそく発令命課があつた。私は、諸井中尉を長とする神鷲第二〇八隊員となつた。この日から

我々の軍服や飛行服の腕には日の丸が縫着されて自重自戒の証とした。

演習は燃料不足の中を「血の一滴と  
思つて実効をあげろ」と鞭打たれつつ  
屠龍の基本操縦から急降下水平爆撃  
(攻撃)にと移り、5月の那須野原は  
おだやかでなかった。巡航三五〇キロ  
から五〇〇キロ近くまで加速するのは  
降下角度の深まり如何で操縦桿の抵抗  
は大きく変わる。「人生最後の力だガ  
ンバレガンバレ」となるこの状態に、  
二五〇キロのお荷物を一箇かかえる  
と、我々の練度で果たして敵艦まで到  
達できるのかと、まことに心細くなる  
こともあった。

邀撃機の不足と防衛能力の低下で、  
日本本土を米機の思うがままにさせ、  
全国の主要都市は灰燼に近かった。  
我々は「決と号部隊」ということで敵  
襲があつても待避するばかりで飛行は  
許されなかった。「特攻温存戦法」で  
ある。あの大地を押しつぶすような爆  
音には「おのれ！」と血のたぎること  
はあつてもどうすることもできない。  
しかしここまで追いつめられた以上は  
人を失い、機を消滅しても本土防衛は  
至上命令である。

未熟ではあつても我々の各隊は何と  
か一人歩きはできるのだ。これ以上米  
機の跳梁は許せない。この強い声は上

層部にも達したのかようやく我々の部  
隊へも出撃準備の命令が届いたらしい。  
8月11・12日のこと。それを受け  
て部隊内は出撃準備の下命を二〇一隊  
とした。二〇一隊は小池中尉・小川中  
尉を編隊長とする六機二編隊で、同期  
の横山善次少尉は小川隊の僚機となつ  
ていた。彼は水戸の出身で明治学院に  
学んだ温厚な肚のすわった男で、沈着  
冷静ともいえる飛行熱心な同期生で  
あつた。13日、高品少将主催の壮行会  
が鳥の目兵舎の雑木林の中で行われ  
た。冷酒・勝栗・するめという悲しい  
までの乾杯であつた。送り送られる者  
の命をかけての別杯である。横山少尉  
には、かける言葉も出なかった。

8月13日午後5時50分、後藤機は故  
障のため遅れたが、小川・横山両機は  
爆装して那須野の土をかけた。小池隊  
は雲上を行き、小川隊は雲下を行つ  
た。この日20時、第一航空軍の対空無  
線は小川機からの突入無線を傍受した  
とのこと。感状は贈られたが8月15日  
は終戦の日となつた。わづか二日間  
は。横山大尉よさようなら。鹿島灘へ  
向かつて手を合わせた。私は9月  
早々、特攻散華した小川満少佐の靈位  
を奉持して香川県の御生家に御届けす  
べく、黒磯の地を後にした。

感状は、戦没記録について去る52

年、片山啓二君が茨城県へ問い合せを  
し、死亡確認書と共に受領されたもの  
である。

感 状

陸軍少尉 横山善次

右ノ者昭和二十年八月十三日一七  
四〇頃鹿島灘東方洋上敵機動部隊ノ  
攻撃ヲ命セラルルヤ必死必沈ノ決意  
モ鞏ク折柄ノ悪天候ヲ冒シ優勢ナル  
敵機ノ跳梁ヲ排シ航空母艦數隻ヲ基  
幹トスル敵機動部隊ノ一群ヲ捕捉シ  
テ果敢ナル突入ヲ敢行シ航空母艦及  
巡洋艦各一隻ヲ大破炎上スルノ戦果  
ヲ収メタリ是至誠盡忠身ヲ以テ敵ヲ  
撃碎シ從容として悠久ノ大義ニ生キ  
ントスル神鷲隊ノ神髓ヲ遺憾ナク発  
揮シタルモノニシテ其ノ武功拔群真  
二軍人ノ龜鑑タリ  
仍テ茲ニ感状ヲ授与シ全軍ニ布告ス  
昭和二十年八月十四日  
第一航空軍司令官 安田武雄

回想・折鶴戦闘隊

折鶴会 辻田 和夫

我々が飛行第五十四戦隊(別称、折  
鶴隊)に転属したのは、昭和20年2月  
中旬であつた。台中練成部隊、明野飛  
行隊の富士分教場で九七戦の戦闘訓

練、単で初期訓練を経てこの部隊へ配  
属された。この戦隊の主力は昭和19年  
11月比島作戦に参加し、三か月の作戦  
で二八名の内、生還者は僅か六名とい  
う惨憺たるもので戦力の大半を失つ  
た。千島に派遣されていた一個中隊と  
僅かな留守部隊のみとなり、そこへ  
我々二期生二名、召集尉官四名が補  
強された。重点的な優秀者教育を経て  
きたとはいえまだ半人前の操縦者だつ  
た。緊張感で胸が痛かった。訓練の過  
程で特に印象に残つた思い出は、台中  
から明野本校へ移り兵舎に入ると、特  
攻隊自習室の掲示板がまず目に入り、  
先輩の一期生が黙々として机に向かっ  
ていた。飛行場では急降下の特攻訓練  
を繰返し実施しており、一種異様な悲  
愴感が漂っていた。

初期訓練の段階ではさほど感じな  
かつたのだが、訓練が進み技倆が向上  
するにつれて緊張感が増幅されてく  
る。実戦部隊の戦闘機乗りは消耗率が  
非常に高く、飛行時間が千時間以上の  
人はほんの僅かで神様といわれてい  
た。実戦部隊へ配属されるということ  
は、長くて半年の寿命と覚悟しなければ  
ならない。努力し訓練を重ねて優秀  
な技倆を修得することが即、死期を早  
める結果を招く。訓練の過程が進むに  
つれてなにか不安がつのり、胸の中が

灰色の暗い世界になっていった経験がある。一生懸命働き会社の成績を上げることにより、自分自身の出世、豊かな生活につながる現代とは少し違っていた。やはり現在のまことに平和な世界をいつまでも続けていきたいものだ。

我々が沼の端飛行場（苫小牧近郊）

に着任したのは20年2月中旬であった。厳冬のさ中で、前年の12月4日に台中で海難訓練と称して海水浴をしたのを考えると余りの環境の変化に戸惑ったものだ。当時の我が戦隊の機種は一式戦Ⅱ型であった。翌日飛行場に出てみて驚いた。滑走路がどこにあるのか見えないのだ。この飛行場は苫小牧東部の火山灰に覆われた不毛の原野に滑走路を造ったものであるが、その時は一面の雪で、僅かに舗装された一本（三本の滑走路のうち二本は舗装なし）のみを使用していたのだが、これも高さ二メートル半ぐらいの雪堤が両側にあり、滑走路の幅も僅かに四十メートルぐらいしかなく、しかもカチカチに凍結したアイスバーン、上空から見ると白一色、滑走路と田畑の見境がつかず、僅かに雪堤の内側部分は灰色っぽく見えるだけ、ちょうど羊羹の箱の中に着陸するようなものだ。しかも不慣れた一式戦、思わず冷や汗が

出るような状況であった。しかし二度目からさほど苦にならなかつたから不思議なものである。

4月中旬を過ぎたころから、比較的海岸に近い飛行場のため、海霧の影響を受けるようになってきた。5月上旬に沼の端から戦隊の本拠地である札幌市郊外の丘珠飛行場へと移動が行われた。この移動途中で、悼ましい事故が発生し、台中以来一緒であった召集尉官の加納少尉が不時着殉職した。丘珠に移ってからは、石川久治君（戦後病没）の不時着重傷事故があった。当時戦隊の任務は北海道・千島・樺太の防空であった。B29の偵察に二回、米機動部隊の来襲（7月13日〜15日）があったが、艦載機の来襲に対しては、出撃せず、戦力の温存につとめた。終戦直前の8月14日、樺太への進出のため二四機が爆装して落合飛行場へ向かったが、宗谷海峡の悪天候で札幌へ引き返した。以上のような経過で幸いにもほとんど無傷で、一式戦Ⅱ・Ⅲ型五十数機、四式戦二機で終戦を迎えた。操縦者は全員定山溪温泉の旅館に軟禁され、部隊へ帰ってきた時は、プロペラを外された飛行機が整然と並べられていた。戦争は終わったとの安堵感と悔しさが入り交じった複雑な心境であったことを憶い出す。

折鶴戦隊のそれまでの戦歴を略述すると、昭和16年9月、柏飛行場で九七戦三箇中隊で編成され、中国戦線に

進出、長沙作戦に参加、17年には広東に移動、南京防空に参加、5月中旬から杭州へ移動、6、7月には南昌を根拠に米義勇飛行隊P40と空戦、この時九七戦の劣性能を認識させられたという一幕もあった。その後北方の防空に転用され、18年1月には一式戦Ⅱ型に機種改変、4月2日中部軍に編入され、主力は大坂郊外の大正飛行場に移動、一部はスマトラへ転進、バレンバン防空に任じたりしたが、5月末には米軍のアツツ島占領、引き続きキスカ島撤退作戦に備え、7月、北千島柏原基地に進出し、アリューシャンからの来襲に備えた。B24・B25の数度の来襲があり、当時新聞を賑わした軍神横崎中尉、成清軍曹の体当り等、嚇々たる戦果をあげた。その後南方の戦局急を告ぐるに至り、19年11月札幌を出発、比島作戦に参加、所沢で一式戦Ⅲ型に機種改変し、11月4日マニラに到着した。そして早くも5日の防空戦闘で三機を、11日朝の船団掩護作戦で五機を失い、その後タクロバン飛行場攻撃、レイテ湾特攻直掩、船団掩護等の作戦を行い、20年1月末には前述の如く当初のパイロット二八名が六名まで

に減少した。戦闘機の消耗率の大きさがわかる。

### 調布飛行場

#### 終戦まで

知覧会 井野 隆

第四十教育飛行隊の知覧から第十一錬成飛行隊の目達原に転属し、三式戦闘機「飛燕」の操縦訓練を修了した私も特操二期生八〇名の内、半数が沖繩の米機動部隊に特攻出撃して戦死しました。私は調布飛行場で終戦を迎えました。

昭和20年5月4日、特別攻撃隊員の命令を受けた私は、約四〇名の戦友たちに見送られ、小雨に煙る目達原飛行場を後に、九名の戦友たちと空輸で明野と調布に転属しました。明野組になった枝・渡辺らの五名は終戦を迎えることなく一か月後、沖繩で散華しました。調布組になったのは、私と橋本勝雄・大西一久・田中一夫・刀根信雄の五名で5月5日の夕方、蒼茫として暮れゆく武蔵野平野を翼下に見ながら、灰色によどむ多摩川に近い調布飛行場に着陸しました。早春のように寒かったことを記憶しております。私たちがよりかなり前に先発した太田澄夫・

草間弘栄・捧金吉・玉置友哉・飯田幸八郎・羽石泓の同期の戦友がおり、すでに出撃したものと思っていただけに再会の感慨はひとしおでありました。しかし一日違いで、京谷英治・四家稔・朝倉豊たちは知覧に出発した後で、小澤幸夫も7日早朝、調布を離れ、これらの戦友は5月中旬から6月上旬にかけて、全員沖縄の米艦隊に突入して戦死しました。

調布飛行場は京王線の飛田給から徒歩約十分、すぐ裏が東京天文台のある丘陵になっており、私たち特攻隊員の仮泊所の垣根越し一帯は、武威野平野の面影の残った林と畑になってお



調布飛行場にて 左から四人目、玉置・捧・井野・飯田（20年6月）

り、農家が二、三軒散在し、農家の子供たちが、私たちの休日にはよく遊びにきました。後年の昭和35年ごろ、私が仮泊所跡を再訪した時、農地であった所は住宅地が変わっており、仮泊所に一番近かった農家は、みごとな豪邸になっておりました。当時この農家には三姉妹がおり、両親はすでに亡く、長兄は中国大陸に出征しておりました。今は長兄の家族が住んでおり、その昔、いちばん幼かった末の娘さんが近くの工場に働いているとのことで、再会することができました。当時、小学校の一年生であった娘さんは私を見るなり「井野少尉さんですね」といわれ驚きました。「物資の乏しい時代、航空食のお菓子を買ったことが忘れられません」と彼女は当時を回顧して、私が忘れていた出来事をいろいろ話してくれました。彼女の記憶力の良さに驚嘆しました。

私たちは第二四四戦隊に所属、戦隊長は陸士第五十三期の小林照彦少佐でした。彼は六尺近い偉丈夫で、B29の撃墜王としても有名であり、彼の撃墜したB29の撃墜マークが飛燕の胴体に鮮やかに記されているのを、畏敬の眼で眺めたものです。しかし、私たち特攻隊編成組は、帝都防衛戦隊とは別働隊であり、5月8日、次のように所属

隊が決められました。第一六一振武隊は、草間・玉置・捧・羽石、第一六二振武隊は橋本・太田・飯田、第一六四振武隊は、大西・田中と私、隊長は陸士第五十三期の柴山信一少佐、そして他に下士官が二名編成されました。私たちは二機編隊飛行と離着陸、そして主に格納庫を敵艦にみたてての急降下が訓練の大半で、6月下旬横須賀軍港を訪れ、海防艦に乗り、海軍士官から体当りの最も効果的な箇所の説明を受け、実地に東京湾上の海防艦に急降下攻撃を行いました。7月に入ると搭乗者一名に対し二〇分間の燃料しか支給されず、特殊訓練の際は、特別に申請しなければならなくなりました。空襲警報も日増しに激しくなり、飛燕もグラマンなどの襲撃を逃れるために、裏

の松林の奥深い掩体壕に隠し、空襲警報中は天文台丘陵の崖下の防空用洞窟に待避して、高度六千メートルの上空を、銀翼を輝かせ、飛行雲を棚引かせ、悠々と飛翔していくB29の大編隊を、私たちは啞然として見送る日が多くなりました。

飛行訓練は朝の内にすませ、後は掩体壕まで飛行機を手押しで運びました。飛行場から掩体壕まで二キロ近くもあり、運ぶ作業は容易ではありませんでした。整備不良のためか、機体その

ものの性能の悪さのためか、故障機も多くなり、7月下旬には、僚友田中機が多摩川の堤防に不時着する事故があり、私も八王子上空を編隊飛行中、プロペラが空転して落下傘降下を決意したほどでしたが、必死の操作でプロペラが回転して辛うじて飛行場に戻りました。

やはり7月下旬、少年飛行兵の若い伍長が空中火災をおこし、落下傘降下をしましたが、離脱の際、昇降舵に両足を切断され、着地までに出血多量で殉職するという痛ましい事故もありました。僚友飯田少尉も空中火災で非常脱出した経験者ですが、彼は無事着地し、飛行機は山中に墜落したため、民家などに被害がなかったことも記憶に残っております。

空襲は日ごとに激しくなり、地方の中心城市が次々にB29の餌食となり、ついに8月6日広島市に原爆が投下され、8日にはソ連が対日宣戦を布告、9日には長崎市に原爆が投下され戦勢は悪化するばかりでした。そして私にとって生涯忘れ得ない日が参りました。20年8月14日朝、各振武隊が本部に集合、本部付の大貫大尉より次の如き命令が伝達されました。「第一六一振武隊より第一六四振武隊までの四振武隊は明日早朝、当飛行場

を出発し、18日までに九州都城に集結完了すべし。行動の細部は都城にて指示せられるも、目的とするところは沖繩敵機動部隊に突撃敢行なり」

ついに特攻の命令が下りたのです。今日か明日かと覚悟してきましたが、

自分の最後が数日内に迫った時は、さすがに全身の血が逆流するのを覚えませんでした。短かったわが人生が一瞬にして鮮明に甦ってきました。驚くことに、小学校時代の級友のすべての名前が思い出されたのです。そして次から次へ信じられない速さで過去のさまざまな記憶が甦ってきたのです。親兄弟たちはもちろんのこと、私の人生にかかわった総ての人々に、私はあと数日での地球から永遠に消えていきます。さようならと絶叫したい気持ちでいっぱいでした。

14日の夕宴は振武隊員一同と整備隊の将校、本部の副官、大貫大尉そして大映撮影所の幹部も参加され、大いに飲み大いに騒ぎ、最後の晩餐にふさわしい盛大なものでした。

そして翌15日、天皇陛下のご放送があるとのことで、私たちは離陸を変更して正午の放送後出発することになりました。しかし天皇陛下の玉音は思いもかけない全面降伏受諾のご放送であったのです。不滅を信じ十年間の戦いを

続けてきた神州日本は、本日をもって敗戦国に墜ちたのです。

私たちの戦友が肉弾となり世界中を震撼させたあの特攻攻撃は何であったのでしょうか。幾百万人の同胞が戦火に倒れ、国土は焼土と化しました。これからの日本はどうなるのか。茫然自失とは、敗戦の日の私たち日本人すべての気持ではなかったでしょうか。暑い真夏の一日が暮れようとして天文台の杜では鯛(カナカナ)が昨日と変わることもなく鳴いていました。梢の上を夕雲が流れていきました。遠く夕焼けの空に富士の秀峰が眺められました。「国敗れて山河あり」いつの日か祖国の復興を誓いながら私たち特攻隊員は8月25日付をもって部隊解散となり、それぞれの故郷に復員していきま



### 知覧特攻会館へ奉納する佛像

中村 治 陸士60期

生田中賢一氏の著書「帰らぬ空挺部隊」に書かれていました 義烈特攻隊員の特攻遺書、遺詠、特に当

奈良市在住の私の仏像彫刻の師、石賀正氏が平成七年十一月、今次大戦で、沖繩に散華された軍人県民の慰霊のため、観音菩薩を作成し、首里城下の達摩峯西来院に奉納されました。また今年五月知覧特攻平和会館に、特攻隊員の英霊を慰霊するための観音菩薩(全高100cm)を彫刻中です。

私も、早く流れる雲に跨る観音像を、特攻隊員の沖繩へとむかわれる救世の御姿と思ひ、既に彫刻してありましたので、わが師に御伴して奉納する事になりました。我が師が仏像彫刻を始められた動機は、中国で参戦中、戦死した戦友のことが忘れられず、また戦没した長兄の菩提を弔うためと申されます。そして戦争未亡人、定年退職者等素人はかりに仏像彫刻を手ほどきするとともに、国鉄一機関士としての在職中から現在に至る迄、三十数年等身大の仏像を作り、各地の戦没者慰霊協会、寺院にと寄進されておられます。又私も自衛隊在職中、先輩陸士52期

今静かに戦後五十年の事を顧みます

と、あの荒廢から物心両面に受けた大きな傷を負いながら、国民一人一人の努力によって、夢にも見られなかった物質的に満ち足りた生活を送れるようになりました。しかし、最近この数年前から現われる世相は、昏迷混濁から暴走狂乱の状況を呈するに至っております。

その原因は、代々祖先から受けついで子弟への躰と、愛と厳により人間形成にとめた家庭教育、寺子屋から始り小中学校によって行なわれた儒教的社会教育が、戦後導入された自由、民主、個人主義の過った解釈によって、破壊され、我欲と我儘と利那的の目的又は快楽の追求に明け暮れ、ついに應仁の乱よりも更にひどい末世の社会現象を呈するに至つて居ります。

このさい、もう一度国民は総懺悔し、洗心して、少しでも良い社会を作る努力をすべきと思ひます。

更に戦後等閑にされ勝ちだった大戦に散華された英霊、特に国の安泰を願ひ、断ちがたい父母等への想いまでも断ち、特攻に任じた英霊に対しては、通り一辺の慰霊ではすまされず、心から御詫びと英霊が念願した安泰の世を作るため、各人が努力すべき事を、英霊に誓わねばならないとの想いで一杯になります。



わが師が仏像彫刻を作成し奉納される心境もこゝにあり、又私も拙作を願みず奉納に到つたのは、この心境からです。

英霊に捧げる言葉 (中村 治)

わが国土、沖繩に侵攻した敵艦船を、一死をもって撃沈するため、特攻を志し、つきぬ家族への思いも断つて、沖繩へと飛び立ったその気高く崇高な御姿は、正に正に雲上の救世観音菩薩なり!!

時は移りても、なお我等の頭上に雲は流れる。我等空を見上げる時、雲上の英霊に合掌し、必ず必ずその偉業を語り継ぐとともに、この世をできるだ

け正して次代に申送ることを御誓ひ申上げる。  
平成八年五月

南都 大安寺大仏師

石賀 正(悟山)の門弟

大和郡山市九条町

中村 治 70歳

### 観世音菩薩とは

—ある佛教辞典より—

観世音菩薩あるいは観音というほどの展開を考へてみると、はじめ観世音という現世利益のほとけがあった。このほとけに対する信者の祈願は、現世利益のほとけであるだけに千差万別であり、それぞれ勝手な祈願をするのは当然である。そこで観音というほとけは信者の願望に答へる為に種々な姿をしなければならず、さらに他の宗教像とくにヒンドウ教の神々が投影されて、それぞれに特異な姿像をとるに至つた。十一面観音・如意輪観音はその前者の例であり、千手観音・馬頭観音などは後者の例である。

こうして各種の観音が成立すると、本来の観音に特別の名をつける必要を生じ、聖観音または正観音と呼んだ。この聖観音に十一面観音、千手観音、馬頭観音、如意輪観音、不空羂索観

音、准提観音を加えて七観音という。この七観音のうち最後の准提を除き六観音を真言宗では正統的な口伝に基く六観音とし、天台宗では不空羂索を除き六観音としている。

三十三観音は、観音信仰の流布とともに民間で信仰されている諸種の観音を、観音の三十三身説に基づいて三十三種集めたもので、江戸時代中期以後に現れた。三十三観音には青頸観音や葉衣観音のようにインド起源のものもあれば、楊柳観音や水月観音のように中央アジア起源のものもあり、滝見観音のように我国起源のものもある。また白衣観音は中国のものである。

以上がある佛教辞典にいうところであるが、然らば我が特攻観音は何なのか、古来の七観音や三十三観音に含まれていないことは確かである。信者が観音を拝む純一無雑な気持で我々は特攻の英霊を拝む、そこには個人的な現世利益を求める気持は毛頭ない。

### 寺崎隆治名誉会長御逝去

平成8年2月18日自宅にて九十五才の天寿を全うされました。  
次号に追悼記事を載せたいので、御縁の深かった人は御投稿下さい。

# 特攻隊員の母の手記

第五十振武隊 多田良政行少尉 一式戦 特操一期  
20・5・20 沖繩洋上敵艦に突入

菅原 道照

第五〇振武隊山吹隊  
第二隊長  
陸軍少尉 多田良政

行  
これが現身のあの子の最後の姿でし

昭和二十年五月二十日午後七時十分  
「ワレットツニウス」

借行文庫に納める資料探しで、父道大の遺品を整理していて、多田良政の時の父宛の手紙と手記が見つかりました。

昭和39年9月4日の消印になっておられます。その年の5月の知覧の慰霊祭に出席した父が、多田良政の献句「着替なきよみ路の旅の長ければ、飛行服のままに垢づきて居む」、を知って手紙を差上げ、それを機に多田良政は、7月に基地跡を訪ねられ、15年近く手許に暖めておられた手記を、父に読んで貰いたいと、手紙と一緒に送って来られたものであります。

手記は多田良政行少尉以下9名の第50振武隊が出撃された状況を、現地から報道した主婦之友社の婦人記者が、戦後母堂に手記を書かないか、と話を打ちかけて来たので、筆を取っては見たものの、とても人目に触れられる勇氣は起こらず、そのままにされていたものであります。

塗りつぶされたうちに純真に一途に死に向かったあの子達に何の罪があるのでしょうか。

戦争であろうと、平和であろうと、例へばそれが正であろうと、邪であろうと、其時の国家の方針に従ってよりよき道を進んで行くことが国民の義務である以上、その国民としての義務否軍人としての道を我を捨て忠実に守った多くの軍人の死は一体どうなるのでしょうか。

若しあの時一人でも戦争を厭う者が居たとしたら非国民としてどんな答を受けなければならなかったか。

其時々時代相とはいへ宝にも玉にもかえがたくいつくしみ育てた愛し子を賞めたたえこそすれ涙一滴も見せないで死の道へ送り出した父の母のやりどころのない今の心をどこへもって行ったらよいでしょうか。

然しその悲歎の中から又思いなをして見ればその大きな犠牲こそこれから立ち上る日本の平和への導きともなるであろうかと、こうして後に残った母のみじめな心にともる小さな灯としてせめて一人心に慰め言いきかせつつ生きていくのです。

かけがえない子を戦に失った多くの父と母、父を失った多くの遺児、夫を失った多くの妻、この戦を限りに悲

惨な運命を背負はされた多くの家庭、その血みどろな心の痛手こそ戦争への抗議でなくてはならないでしょう。

「大死になって……」  
と人は言ってくれるけれど、決して私はあの子の死を大死だとは思いたくありません。

「皇国を守る者は自分達である」。  
とかたく信じてあんなにも当然のことのように若い生命も、胸一杯の希望も絶ちがたい肉身への愛情もすべてのきづなをふりきって、あんなにもほがらかに征つたものを母の私がなぜ涙を見せられましょう。あの子の心を心として

「此の度の御奉公こそこの世に生まれて来た政行の使命であったのだ」と励ましたものです。

火にも水にも母はいましと共にあり心おくせず征けよ我が子よこの時ぞ命捧げて死ねと言いつし母の心の深きかなしみ

歌を書き添えた日々の便りに私はあの子の覚悟をたたえこそすれ母心の悲しみは露ほども知らせたくなかったのです。

あの子の死がこんなにも惨めな結果になった今でも

「あの子はあれでよかったのだ。信じ

た道を信じるままに進んだのだからあ

れでいいのだ」

と亡き子への悲しい愛情の中からも私は私一人の心の中であの子がえらんだ死を恨む気にはなれませんでした。

あれから五年思っても見なかった種々の世相を見て来た今でもそうです。

大いなる喜びが我に來たるともこの悲しみの消ゆる時なし。現身に

これが最後と床二つ並べて汝とい

寝し思出

小学校から中学校更に専門学校とな

がい学生生活に終止符を打つと直ぐに

自分から進んで飛行学校への道を選び

特別操縦見習士官として家を出る頃には

すでにあの子には戦の重大さがよく

わかっていて自分自身が行くべき道も

ちゃんと覚悟が出来ていたので。

おろかな母はそんなことには少しも

気づかないで二十一のあの子と十九の

のまま答えました。

「僕と全く同じ考えだ、これで安心して行かれる、お母ちゃんは大した哲学者だハハ……」

と大きく笑いましたが

「自分が死んでも母は決して取り乱してなげくような事はないから安心して征かれる」

と後になって其時のことを戦友の一人に話したと聞いて生きてかえらぬ覚悟で家を出た深い決意を知りました。

残して行った日記の一節に

「祖国のある限り個人の死はない生きる為に死んでゆく……高き精神崇高なる現実我にこの意気あり諦観に

あらず宗教に非ず空虚なる議論の結果に

果に非ずしかめっ面な思索の結果に

非ず只斯の崇高なる精神により近づ

かんとする現実の精神なり」

死の高さまで自分を高める為にどれだけあの子は苦しみなやんだ事か、現実のすべての欲望からぬけ切った心境に至るまでのあの子の苦悩を思う時私は

涙なしではいられません。

もう出撃か、もう出撃か心もそぞろに整備基地への面会の旅を幾度くり返した事か、その飛行場では特攻隊員だけが日々烈しい練習をつづけていまし

たが眼を覆いたくなるほどの空中での

放れ技には私は度々心に寒いものを感じ

じながら見ました。

そういう母の心に悲しい印象を残すまいとの心やりからあの子は私がいる間は決して飛行機に乗ることなく、いつの時も明かるくほがらかに話したり

笑ったり食べたりしていたあの子でした。

生き死にのおもいを越えて汝が語る心がまえの尊かりけり

特攻隊と知って再びは生きてかえらぬことを心に深く言い聞かせ四人の育児日記の中からあの子のものを書き抜

いて

「もう一度母のふところを思出してくれ」

と誕生日毎に撮った写真を添えいつ

出撃ともわからぬ心せわしい中へ送り

やとそれも終りとなった或夜、

「明朝八時出撃基地へ出発となった」と長距離電話で

「お母ちゃん、さよなら……さよなら……さよなら」

と叫ぶように此の世で最後の声を送って来ました。

これがあの子の声の聞きおさめかと

受話機を碎いて声について行きたい程の思いでした。我が子の死床に泣く世

の母の悲しみに数倍まさる思いに胸つぶれて、それから死の知らせを耳にするまでの四日間を昼もなく夜もなく寝

るも起きるも我が身に心もそわぬ思い

で過し、今か今かとラジオにかじりついて身も心も細る思いでした。

遂に五日目の午後七時あの子達十二名の山吹隊が艦砲射撃中の米戦艦へ突

入との簡単なニュースを聞きました。

それまでどうにかこうにか張り切っていた気もちも全身の血と共にスーッと引く心地で

「アーアッ」

と言ったままうつ伏せて暫らくは身

も世も忘れ

「政行は死んだ 政行は死んだ」

と泣くことさへも忘れてつぶやくばかりでした。

最近の便りには

「お母ちゃん、まだ生きています」と端書に一行ばかり書いたり

「父の一周忌頃には……」

と書いたりしていましたがその父の

命日より二日早くあの子は遂に母のいる此の世から姿を消してしまいました。

大君に捧げし子ぞと思ひ決めし心裏ぎり涙湧きくる

裏ぎり涙湧きくる

出撃の模様を一日も早く知らせたいとのあの子の心やりで特攻基地に居られたあの子の学友だった新聞記者の御

尽力で、それから三日目の夕方には少しばかりの遺品と共に

「出撃の直前お茶のお手前の真似事をした」

「のり巻をもって飛行機にのった」

「とても元気でほからかに征く」

あの子がふだん外出して家に帰ると外での事をあれこれ話す癖があったがその通りにつぶさにしかしきれぎれに記した手記が届いて来ました。

それから少しおくれて当時発行の月刊婦人雑誌、主婦の友の特派婦人記者の

「国を守る若き伸々と共に」

の記事によって基地に於ける様子、出撃の様様ことに第二隊長としてのあの子の態度、言葉等を委しく知ることが出来て悲しみの中にもいささか心慰められるおもいでした。

私への最後の便りが四五日おくれて手に入りましたが

「なつかしい母上様 なつかしい母上様」

とくりかへし呼びかけて

「私は理解あるお母様をもってほんとうに最後まで幸福であった、二十三年間のこの幸福を胸に抱いて思い残さず出撃します……」 北支派遣中父を亡くしましたので残った私へ母へ母へと最後まで切々の思いを運んでくれました。

整備基地へ残してあったわずかばか

りの遺品は心あるお方の協力によって死んで三日目には私の手に帰り、一週間目にはやはり民間のお方の御厚情によりまして原隊からの遺品全部が届きました。それ等の遺品はそれぞれ整理も行届いておりいささかも心の乱れは伺われませんでした。

満二ヶ年の軍隊生活中へ私が送ってやった新聞や雑誌の帯封を丁寧な抜き取ってまとめ紙袋に納めていました

が、

「母の筆蹟だから破り捨てられない」

と親友に語ったと聞かされて幼い頃から思いやり深い優しい子であったと思出に泣くばかりです。

小さい時から大の故郷自慢で専門学校時代には尾道を紹介するのだと休暇の度に同窓のお友達を二三人お連れしては帰省していました。

飛行機の都合で原隊から整備基地へは只一人で飛びましたが、その途中故郷尾道もいよいよ見納めと思ったか尾道の空を幾度も低空旋回をして心ゆくまで名残りを惜しみ、尾道の人々も其日あの子が飛ぶことをどうして聞き

知ったのか、友人に限らず尾道の屋根の上は旗の波といたい程盛んに送っていたいただきましたことを非常に感激して喜んでいました。

女学生の慰問など受けた時にはきつと

「故郷を離るる歌」

の合唱をお願いしてはちつと聞き入っていたり自分も合唱の仲間にはいつて歌っていたそうです。

そのなつかしい故郷への愛着の深さを思う時立派に覚悟はしていてもどんなにか寂しい幾夜々を過したことでしよう。

突入の一週間前まで書きつづけていた日記の中にも

「吾は帝国軍人なり」とか「吾は陸軍将校なり」とかしばしば書いている

のを見るにつけこうした言葉によって時々にあの子の心に起こる葛藤から逃れるすべとしていたのかと今更思えばその心情のふびんさに胸をかきむしられるばかりのこの母です。

尾道も空襲の危険がある故田舎へ疎開せよと度々すすめて来ましたが例え

白木の箱で帰るにしても尾道で生まれ育った二人の男の子を送り出した家へ又迎えてやりたいばかりに末娘と二人

でがんばりつづけましたが、建物の強制疎開でその思出多い家も失いついにあの子の故郷尾道にも住まれなくなつて終戦を限りに尾道をも去り勤めの都合で次男や末娘とも別れ住んでまるで敗戦の産物でもあるように次々に我が身にふりかかる不幸にうちひしがれつつ亡き子が永久にかえり来ぬ悲しみ

と共に母は昨日も今日も又明日も……

去りがてに思い親しむ山も海も亡き吾子しのぶなつかしの地ぞ

菅原註 昭和39年多田良ときの様か

ら父宛に来た手紙の住所は、広島県三原市木原町三六一八の一と

なっており、現在御存命かどうか市役所に問い合せましたが回答を得られませんでした。御遺族の消息御存じの方はお知らせ下さい。

第50振武隊（一式戦）

少尉 斎藤 数夫	陸士57大12年生
少尉 小木 曾亮助	特操1 9年生
少尉 多田 良政行	特操1 12年生
少尉 速水 修	特操1 11年生
伍長 飯島 喜久夫	少飛13 14年生
伍長 大野 昌文	少飛13 14年生
伍長 松崎 義勝	少飛13 14年生
伍長 松尾 登代喜	少飛13 14年生
伍長 柳 清	13年生
以上20・5	20 知覧出撃突入
少尉 高橋 暁	特操1 11年生
少尉 藤田 典澄	特操1 11年生
以上20・5	25 知覧出撃突入
伍長 磯田 德行	少飛13 14年生
以上20・5	28 知覧出撃突入

## 海上挺進特別研究部の創設

元海上挺進第三戦隊 皆 本 義 博

我々陸士五十七期は、学校卒業と同時に、戦車と工兵から転科し、六十五名が船舶兵となった。

二ヶ月間、広島市宇品にあった陸軍船舶練習部において、基本となる訓練をうけ、昭和19年7月1日、教育終了と同時に陸軍少尉に任せられ、揃って四国の小豆島に送られた。

この小豆島においては、船舶特別幹部候補生の第一期生が、もと紡績工場の跡で訓練をうけており、我々はこの区隊長に任せられる予定になっていた。

我々が、この特幹隊についてから、引続いて船舶司令官鈴木宗作中将の初度巡視が実施された。この巡視は、我々にとっては、単なる訓練状況視察の程度であると考えられたが、既にこの頃、最高統帥部においては、陸軍の水上特攻隊編成の案が考えられ、着々と実現化していたのである。

司令官の巡視は極めて正確に実施され、夕刻15時にはあらゆる業務が終了

した。私どもは緊張から解放され、見送りのため管門に整理していたが、急に部隊副官から呼び出し

があり、急いで部隊本部の方に足を運ぶ

と、同期の杉浦晋三・中川好延と三名、本日付をもって船舶司令部付となり、かつ鈴木軍司令官に同行する旨告げられた。我々は、駈足にて宿舎に到り身辺の小道具を鞆の中に詰め込んで

もとの位置に戻り、見送りの待機線の先頭の部隊長に申告し、司令官離隊の最後尾に連なつた。我々の発令も余程火急のものであったらしく、直接我々とながかりを持つべき人達も、殆んどそれ迄知っていなかった。

広島（宇品）についてから翌日、この日も朝から雲一つなく晴れ渡つた。リジリ焦がすような炎天であった。

我々三名は、前もって示された船舶司令部の凱旋館の二階の方に歩いて行つた。船舶司令部は、みんな忙しい様子であるのに、この凱旋館の二階は森閑としていた。示された部屋（応接室）

はすぐ判った。我々三名はドアを押して中に入った。中には約十四・五名がそれも上衣を脱して盛んに扇子を使っていた。

我々は、先任者と思われる無難な方向に対し礼を済ませて席に着こうとする、中の一人が大喝一声「貴様等はどこから来たんだ」とどなり散らした。

正午近くになって中坐してトイレに行った。ドアの外に出て見ると実はびっくりした。此の応接室の外側の廊下に憲兵の腕章を附した下士官が数名、如何にも事務的な冷たい眼をして見張りを実施していたからである。

昼食が部屋に運ばれてから、自己紹介が始つた。色の浅黒い中佐は大本営参謀兼船舶司令部参謀の青井中佐で、色の白い眼の輝いている少佐が、さき程大喝した齊藤義雄少佐で、これから編成される特別研究部の隊長のようであり、その隣が副隊長要員の赤松嘉次大尉で、その他は概ね少尉クラスであった。

青井参謀は、齊藤少佐と何か打合わせをしていたが、「これからの予定を申し上げる。これからまづ昼食をとる。昼食終了後諮問をする。この諮問合格者のみが、軍司令官の訓示をうけることになる、早速であるが食事をとるように」とのべた。

食器が取払われると、更紙1/2大の紙片が各人に渡され、四つの諮問がなされた。

一、如何なる任務と雖も完遂する決意があるか

二、企図を絶対に秘匿し得るか

三、自分が死んだ場合家族が生計に困ることがないか

四、如何なる訓練にも耐え得るか

諮問の審査が済むと、全員が服装を整え佩刀して整列した。船舶司令官鈴木宗作中将は、随員をしたがえ、ゆつたりとした歩調で部屋に入り、温容でたえず口元に微笑をたたえられ慈父の面影をして居られ、訓示をなされた。

「諸官も既に承知しているとおり、この戦局も愈最終の段階に及んでいる。

目下の勝敗の帰趨も必ずしも我が方に有利であるとは云えない。我が軍は南、北に陸海挙げて善戦健闘を続けているが、最近における状況は樂觀を許さない状況にある。我が船舶兵は、従来は海上における小距離輸送、上陸作戦の支援のみを担当していたが、これからは我々自体が或る程度の海上戦闘を実施しなければならぬ。海上戦闘は陸軍としては未だ経験もなく、且つ可成りの危険と被害が伴うものである。それだけに、此所に集まつた優秀なる諸君に心からの信頼をおき、亦何物にもかえがたい期待を寄せるものである。

勿論海軍においても、乏しい兵力か

ら一部海上護衛の任務を担当し、主力はあげて決戦に投入しており、みなと共に、祖国日本の命運を賭すべく、特殊任務の訓練を開始している。物事の道理から申すと、年老いた我々老人が先に死んで、若い諸官が後で死ぬことが、理の当然と云うべきであるが、人各々その与えられた職務がある。若い諸君に先に死んで貰うことになるので、司令官として誠に申訳なく考えている。だが、いはば乗り出した船で、現在の戦局から徒に先を憂い拱手傍観すべきではない。全力をあげて海軍力の不足を補い、祖国の勝利のため、心からよるこんで捨石となって貰い度

い。一億の同胞が、みんな諸君の一挙手一投足を期待していることを申し添えます。それでは諸君、任務達成の日迄、自重自愛、隊長を中心として充分に技を磨いて戴き度い。私は早速大本営の方に答申のため出発することといたします。」

司令官の訓示で身の引き締る感激をした我々十八名は、陸軍水上特攻隊の訓練を開始することとなった。

新しい作業服・作業帽・靴・眼鏡が支給された。これ等は一部は既に船舶部隊で使用中的のものであったが、靴・眼鏡は特別誂えのようであった。

我々は、軍のトラックで荷物をとりに

走り、夕刻迄に広島市宇品の第一棧橋に集結した。この棧橋に船舶司令部の高速艇乙が出迎えに来て、西に傾いた真夏の夕陽を右舷に受け、一路広島湾を西進し、検疫所のある似島を左舷に見、やっと無人島に到着した。海図で見ると大カクマ島となっていた。

この島には、住人のない別荘が戸あり、既に経理部が先行し、必要な物資の揚陸が行われ、島の近くに小型の汽船を碇泊させていた。島の周囲は二百米あり、松の木が生い茂り、頂上附近の家は建坪も可なり大きく、我々十八名の居室並びに会議等には事欠かなかった。

訓練は、最初の二・三日は昼間、民船の航行のない頃を見計って実施したが、企図秘匿のため夜間のみとされ、昼間は検討会を行った。

艇の速度は約二十四節出る上に、艇体が極めて小さいので、瀬戸内と雖も波頭が立つときは操縦に難渋した。よく前部のベンチレーターから塩水が侵入し、船垢と一緒にドロドロしこれが全速回転するプロペラシャフトで跳ね飛ばされ、顔や体が見るかげもなくよごれた。

訓練がある程度進んだ7月24・5日頃・海上特攻の検討のための合同会議を開くことになり、大本営から佐官参

謀十二・三名が岩国飛行場経由で来島し、船舶司令部からは司令官、参謀長、材料廠長他関係幕僚全員が出席、我々水上特攻研究部員も揃って参加した。

会議は船舶司令部の状況説明から始まり、経過報告、大本営の意図伝達が行われ、最後に本論である試作艇をもちする特攻攻撃の可能性・攻撃法・編成・装備等について逐次検討が進められた。此の会議は議長をつとめた参謀長の計らいで、極めて家庭的な雰囲気のもとに協議が行われ、特に齋藤隊長以下各部員のすべての意見を聴取された。先づ特攻兵器としての可能性

では、企図秘匿および防禦力においては充分とはいえないが、日本の現況においては止むを得ないものであり、訓練の精到を以てすれば、成算の確率極めて大であるという論拠のもとに、制式採用が決定された。次に攻撃法においては、先づ攻撃目標の選定範囲が討議されたが、主として泊地侵入中の輸送船を主目標とし、状況によっては逐艦以下の艦艇の攻撃を行い、ある程度のグループをもって攻撃することとした。一発必中自爆か、或は、必中

を期しての反覆攻撃かは、両論が抬頭し仲々定まらなかったが、研究部員としては、爆雷を接近投下後退避すると

いう後者の方法は、いうべくして実施困難である。一発必中自爆の方が確実性が大で、又退避することは、艇速および防禦力から見込みが立たない旨申入れて大方の了承を得た。

編成は戦隊、中隊、群編成が妥当である旨衆議一決し、戦隊は三ヶ中隊、中隊は三ヶ群編成とし、一ヶ中隊は中隊長以下将校四、下士官二十七名計三十一名、艇数三十の編成となった。なおこの他に戦隊の基地勤務のため約一ヶ大隊を附する旨決定された。

装備は、艇首に爆装して自爆を考えるか、或は爆雷投下を採用するかで大きく異なるが、本会議においては艇首に爆装することに決した。前述の通り艇の防禦力が弱いので機銃装備の意見が出たが、補給の見とおしたたず、従って各搭乗員には、自動拳銃と手榴弾のみを支給し、いはばこれ等の武装は最悪の場合の自決用と云う意味であった。なおこの他に群に一挺つつ機関短銃を装備することが附け加えられた。

注、その後の中央での検討において、艇首に爆装し自爆することを変更し爆雷投下の方武に決定された。

7月の末頃、部員は一週間の予定で、それぞれ募参休暇をもらった。広島に帰隊すると、その翌日、天覧に供

するための映画の撮影が待っていた。

我々特攻研究部

その日は好天で、私は第三群の三番艇となり、15時頃金輪島のドックを出発し、似島と江田島の間を直進することとなった。この日は民船の航行を一切

員は、撮影が終った夜、秋津丸に乗船し小豆島に向った。我々の到着と共に、俄かに活気

遮断してあり、与えられた海面を自由に航走することが出来た。似島の東方

を呈し、小豆島の西側の豊島におい

に差しかかると仮想敵（海軍の魚雷艇数隻）の右舷九十度からの襲撃をうけた。うなり声をたてた魚雷艇はその高

速を利して攻撃にかかった。攻撃艇は退避するのに精一杯である。船足の差

は如何ともし難く距離は見る間に縮められ、魚雷艇の巻き起す大きなうねり

で、我々の艇は大きくジャンプし、その際座席板が折れ、エンジンもエア

を吸い込んで不調となった。魚雷艇の攻撃を避けて似島西方に進出した時、

前方約二裡に空母（海軍の補助空母のち陸軍所管の秋津丸）および大型輸送

船二隻が望見された。我が艇は、エンジンガasketが粗悪なため破損して

いるもようで、油圧計の指針が盛んに振れ出した、これは危険信号である。

艇を停止すべきかと考えたが、右舷三十度方向に、高速艇が撮影機を向けた

カメラマンを乗せ走っている。私は再びレバーを一杯に引いた、目標船の船

側に到着したとき、ボンと云う音とともに機関が停止した。

（戦後の手記による）

## 英霊は語る

田中 賢一

話ができ、また生死不明の者の消息がわかるという評判が高かった。そこで私は山田中尉を誘って牧山さんを訪ねた。

義烈空挺隊は熊本健軍飛行場を発進

後、四機が機関の故障や途中敵泊地の

上空で被弾したりして引き返し南九州に不時着している。そのうち一機の操縦者水上清孝曹長が着陸時の火災で戦

死したが、それ以外の者はその時は生き残った。第三独立飛行隊の者は第六

十戦隊に転属となり、奥山隊の者は差出し部隊の第一挺進団の所属となっ

た。第一挺進団では受入れた人達を、軍曹以下は原隊の挺進第一聯隊に入

れ、曹長以上は団司令部やその他の部隊に転属させた。そして、私の挺進戦

車隊には山田中尉が転属となった。挺進戦車隊には編成上歩兵中隊があり、歩兵出身の山田中尉は過去のこと

は忘れたように職務に精励していた。ところが突然の終戦で、彼の頭は沖縄

に突入した奥山隊長や自分の小隊で別の搭乗機だった者のことで一杯になったの

のたのた。私も山田中尉も残務生理というところで、宮崎県川南村にある

我々の基地にしばらく残っていたが、彼はそのことばかり言い仕事も手につ

かぬ有様だった。当時延岡の南の門川に牧山さんという霊媒がいて、死者と

話を語り、また生死不明の者の消息がわかるという評判が高かった。そこで私は山田中尉を誘って牧山さんを訪ねた。

霊媒は老婆だった。山田が一部始終を語り奥山隊長殿はどうなさいましたかと尋ねた。老婆は神棚に向い何やら

称えながら一心不乱に祈った。部屋は薄暗く鬼気迫るものがあった。老婆は座ったままの姿勢で一尺位数回跳び

上ったかと思ふと倒れてしまった。我々は呆気に取られて眺めていると、

やおら起上り、我々に向かつて言った。「今奥山隊長さんに会いました隊長さんは、ああ残念なり」とひとこと言は

れて立ち去られました。山田中尉はその場に泣き伏してしま

い、私は彼を扶けて一礼して部屋から出た。ああ残念なり」とは何だったの

だろうか。奥山隊長機は途中で撃墜されてしまったのだろうか、それとも

特攻作戦で多くの若者が命を捨てて戦ったのに国が敗れてしまったのをいうの

だろうか、そんなことを思いながら帰途についた。

現在再び霊媒を煩わし、英霊に伺いをたてたら何と申されるであろうか。

東京裁判史観に汚染された為政者、民を迷はすマスコミ、一つとして残念ならざるはなからう。



## B-29の基地マリアナに

### 対する陸海軍の経空攻撃

要因となった。

我が陸海軍は眺

梁するB-29に對

し防空作戦だけで

なく、その基地を

制圧しようとする

ゆる努力を傾注した。

二三〇キロの

彼方にあるこの蕞爾たる孤島に對する

経空攻撃は、それが特攻と呼ばれな

かつたものであつても、生還を期し得

ないこと何等特攻と異なることはなかつ

た。

以下サイパン攻撃を陸軍航空、海軍

航空及び未発に終つた陸海軍の空挺に

区分して、眺めてみよう。

〔陸軍航空〕

教導航空軍

(大部分は戦史叢書「沖縄・台湾・

硫黄島方面陸軍航空作戦」抜粋)

特別任務攻撃隊の編成と訓練

マリアナ諸島が敵に占領された場

合、これを基地として本土が空襲に暴

されることは、敵のマリアナ侵攻以前

から判断されていたので、サイパン失

陥直後の7月20日、参謀総長指示を

もつて陸軍航空總監に對し、小教機を

もつて洋上一二〇〇キロの航程を飛翔

し、敵飛行場に在る敵機に對し「タ

弾による必殺攻撃に任ずる部隊三個中

隊を編成することを命じた。航空總監

(19年8月8日教導航空軍司令官とな

る)は、この総長指示に基き、下志

津、鉾田兩教導飛行師団に、司偵各一

個中隊を、浜松飛行師団に重爆一個中

隊をそれぞれ編成し、特殊訓練を行は

せた。なおこれらの司偵は「タ弾」二

発を搭載できるように改装された。

浜松教導飛行師団では新海希典少佐

を隊長とし、隊員は乙種学生の課程を

終わり、教官要員として同飛行師団に

とどまつた航空士官学校の第五六期生

を主体として編成した。各機とも搭乗

員は、正副操縦手、航法兼爆撃、通

信、機関、射手二の七名であつた。整

備、通信等も優秀者を選抜した。この

ようにして自信の持てる攻撃隊が編成

された。

訓練は編成完結と同時に開始され、

その主体は総長指示に示された洋上

一、二〇〇軒の航法であつた。連日薄

暮に離陸し、編隊で夜間洋上を航進す

る訓練が、約四〇日間わたつて行な

われた。コースは濱松から南は九州大

隅半島佐多岬、または種子島、北は北

海道、日高の襟裳岬、根室の納沙布岬

に及んだ。主としてこれらのコースで

洋上推測航法の猛訓練をやり、翌払曉

に帰還するのが日課であつた。訓練範

圍は沖縄、鳥島、朝鮮半島と次第に拡

大された。浜松では夜出て朝帰るこの

部隊を、いつのころからか「夜鷹部

隊」と呼ぶようになった。時には照

飛連合訓練を実施した。敵の基地攻撃

の際、地上から照射された場合に備え

て、浜松高射砲隊の照空灯数本に捕捉

させ、それを超低空で離脱する訓練で

あつた。飛行機の大整備のときは、室

内の図上訓練が繰り返し行なわれた。

サイパン基地の精度良好と思われる電

波探知機の偵知を避けるため、鳥伝い

に超低空で、その死角を飛行したり、

あるいは欺瞞紙を撒布する訓練も行な

われた。10月を過ぎるころには、隊員

の士氣もいよいよ旺盛で、いわゆる油

の乗り切つた状況であつた。

鉾田教導飛行師団ではまず攻撃隊編

成の基幹となるべき要員を下志津に派

遣して、百式司偵の未修教育を行なう

とともに、航空士官学校第五六期卒業

の若手教官を主体として攻撃隊を編成

した。隊長には森任士郎少佐(47期)

が任命された。下志津で百式司偵の操

縦を修得して鉾田に歸つた隊長以下三

名の将校が教官となり、司偵の未修教

育を攻撃隊全員に行ない、終つてサ

イパン攻撃の訓練に入った。訓練の主

体は、夜間航法と前照灯による夜間着

陸であつた。飛行は灯火を一切使用せ

—マリアナの基地に對す

る航空攻撃—

—未発に終つた二つの空

挺特攻—

我が本土に對するB-29の戦略爆撃

は、成都に基地を構えた在支米空軍に

よつて、北九州地区に對し19年6月15

日以降20年1月6日までの間一〇回

巨り行はれたが、米軍にとつては余り

効率のよい作戦ではなかつた。19年7

月サイパンを手中に収めるや、米軍は

我が海軍が使つていたアスリート飛行

場を拡張整備し、戦略空軍の主力をこ

こに移し日本本土全域に對する爆撃態

勢を整えた。

サイパン基地のB-29の本土來襲

は、19年11月2日関東地方に飛來した

二機の偵察行動に始まり、11月24日約

七〇機の帝都空襲をもつて本格的空襲

に入った。この戦略爆撃は日を追つて

熾烈となり、我が本土の重要部分焦

土と化し、これが全面降伏に至る一大

ず、離陸目標灯だ一つで、あった。襲撃行動には熟練していたが、問題は夜間航法であった。

下志津教導飛行師団では攻撃隊員の人選は、主として乙種学生を修了し、学校に教官要員として残された優秀者の中から選抜された。機数は約六機で、各機とも操縦、偵察二名が組みで搭乗した。隊長は池田春雄少佐(49期)であった。

池田隊の訓練は、海上航法および超低空の「タ」弾攻撃が主体であった。

「タ」弾攻撃は落下点の把握が主要演練事項で、地上に白線で標示して訓練した。航続距離延伸のため胴体下面に八〇〇立入りの落下タンクを増加装備し、両翼に「タ」弾を懸吊するよう改修した。訓練期間は十分でなく、硫黄島航法を行なわないうちに11月を迎えた。増槽および「タ」弾を装着すると離陸時、滑走距離が延びるため、出発飛行場は柏に変更された。

これら三つの部隊は10月中旬に正式編制部隊となり、浜松の部隊は第二独立飛行隊、銚田のは第三独立飛行隊、下志津のは第四独立飛行隊という名称が与えられた。

サイパン基地の偵察

10月の情勢は、サイパン基地からするB-29の本土空襲のいよいよ切迫し

ていることを思はせるものがあった。教導航空軍司令官は総長指示に基き、下志津飛行師団にサイパン基地の偵察を命じた。

11月1日、B-29一機が関東地区に偵察に現れたが、我が方も丁度この日にサイパン偵察を行った。下志津師団の百式偵一機は、往復とも硫黄島で給油し、サイパンのアスリート飛行場を高度八〇〇〇で写真偵察した。

第二独立飛行隊の第一次攻撃

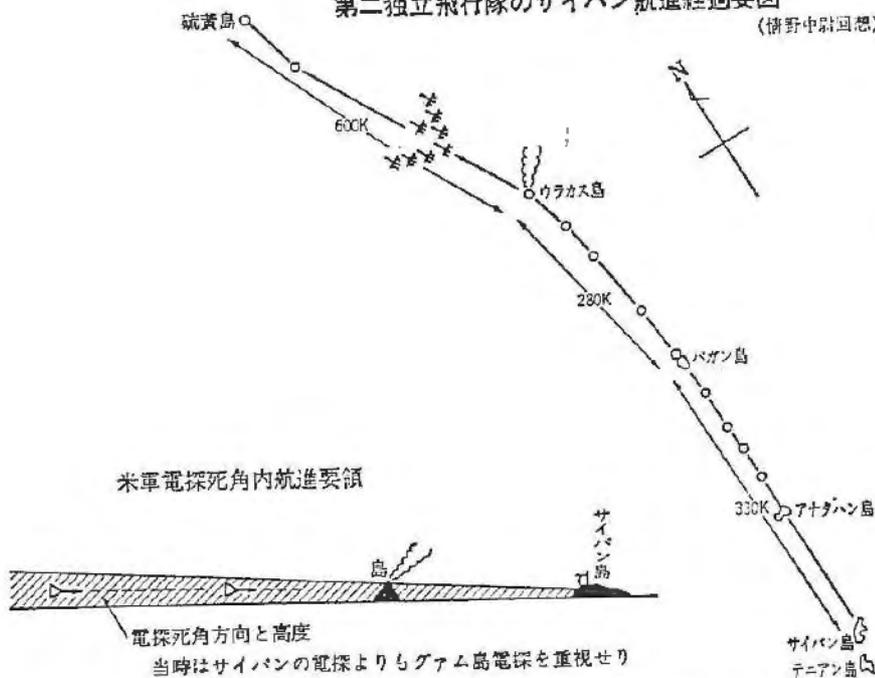
10月28日、大本営は教導航空軍に対しサイパン基地の攻撃を命じた。教導航空軍では11月3日以降、随時攻撃を実施するよう準備を進めていた。しかし海軍はB-29初出現のこの機に乗じ、2日、中攻部隊をもってサイパン基地を攻撃しようとし、その旨を陸軍に通報してきた。そこで陸軍は諸般の準備がまだ完全でなかったが、奇襲の意義を重視し、この際多少の準備不十分を忍んでも、海軍と共に第一撃を決定することに決め、第二および第四独立飛行隊に、サイパン島アスリート飛行場の攻撃を命じた。この際、準備の特に遅れている第三独立飛行隊は、司令二機を第四独立飛行隊長の指揮下に入れて攻撃に参加させることとした。

第二独立飛行隊の隊長新海希典少佐以下九七重二型九機は、11月2日一二

二〇浜松飛行場を離陸し、編隊で硫黄島に向かった。天気は晴朗で快適な前進行であった。四時間半の飛行のち一六五〇硫黄島に到着した。航進高度は一、〇〇〇〜一、五〇〇米であった。11月の夕陽は正に沈もうとしていた。直に燃料補給と爆装を終り、搭乗員は機側で小憩をとった。故障機一機を硫黄島に残し、新海編隊八機は、一九五〇硫黄島を離陸し、一路サイパンに進出した。まず硫黄島から、活火山で明瞭なウラカス島に向かい、これから島伝いにアナタハン一途から引き返して七機となった。航進高度は出発後しばらくは二、〇〇〇〜二、五〇〇米で飛んだが、次第に高度を下げつつ、ウラカス島まで五〇〇米、以後さらに高度

第二独立飛行隊のサイパン航進経過要図

(偵野中尉回想)



を下げ、サイパンの電波警戒機の死角を利用するため、終わりのころは四〇〇〜五〇〇米の超低空で航進した。

新海隊苦心の超低空接敵は成功し、攻撃隊は超低空でアスリート基地を攻撃した。奇襲が成功し、各機は「タ」弾攻撃と機上火器による銃砲撃を併用し、六カ所に火災を発生させたと報じた。

器材、航法等によりサイパンを攻撃できない機も生じた。当時の状況を、情野

中尉（通信係将校）は戦後、次のように述べている。

「サイパン島到着おむね五分前に、新海隊長は攻撃を令し各編隊毎の攻撃に移った。前方の海面にボンヤリトと灯火が映り、遂に目指すサイパン島に到着した。搭乗員は一段と緊張を増した。新海隊長機は陸地上空に入ることを避け、サイパン島を横に見る姿勢で南下を続ける。攻撃目標のアスリート飛行場はまだ見えない。ガラパ

ンの街が遠く弱い光を出して燈火もついている。アスリートはあれだ、と新海隊長が指さした。飛行場は煌々として不夜城さながらである。大きく旋回して突撃コースに入る。突撃開始の無線が発せられた。各機それぞれ超々低空の攻撃である。海面上を超低空で飛んで、島の丘に一気に上ったのが、下腹にグーンとこたえる程の全速であつ



新海希典（58戦隊当時の写真）

た。アスリート飛行場は昼の様な明るさである。B-29の銀翼がギッシリと並んでいる。トラックがライトをつけて走っているのが見える。攻撃は、完全に奇襲成功である。「タ」弾の爆撃と同時に機上機関砲、機関銃をもってB-29を攻撃した。攻撃は短時間で終了し、攻撃隊は奇襲成功を基地に電報した。攻撃を終わってふり返ればアスリート飛行場は、爆煙に包まれ、大きな火柱を認められた。

新海機には、対空砲火の抵抗もまったくなく、快心の攻撃であった。」

このように奇襲は成功し新海機は直ちに帰途につき、単機で島伝いに飛行して硫黄島に帰還した。硫黄島に帰着した時はすでに夜が明けていた。攻撃隊八機のうち五機がまだ帰還していなかった。隊長は本土方面の天候悪化を考慮し二機を先に浜松に帰還させ、単機で硫黄島に残って僚機の帰還を待ったが、午後になっても帰らなかつた。のちに海軍側の通報により二機は自爆、一機はパガン島に不時着と判明したが、他の二機は不明であった。

新海隊長は単機で硫黄島に残って僚機を待ったが、この間に気象状況はますます悪化した。本州到着所、雨の気象報であった。しかし航法に自信のある隊長は海面を這ってでも浜松へ帰る

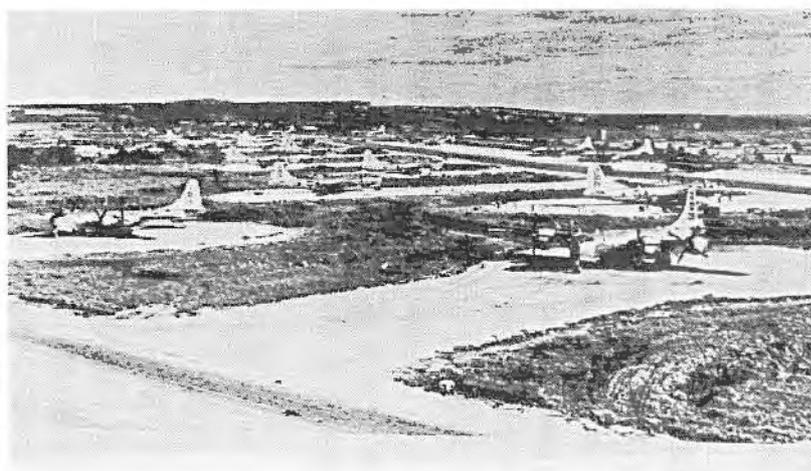
決意のもとに、3日一五三〇硫黄島を離陸し帰途に着いた。

飛べども飛べども白雲の層で切れ間はない。もう本州に着く時間である。航測により遠州灘上空とわかったが、雲が低く浜松には着陸できない。対空無線隊から「九州晴、宮崎に着陸せよ」と知らせてきた。しかし九州までの燃料はすでにない。旋回して雲の切れ間を捜した。雲上の陽も沈み月が出ている。やがて燃料標示灯の赤ランプ

が点じられ、しばらく飛ぶと雲の切れ間からキラキラ光る波が見えた。新海隊長自ら操縦桿を取って急降下して雲下に出た。地点標定と航測により土佐湾にすることがわかった。浜松からの地上連絡により、高知の海軍基地に夜間着陸設備が依頼された。赤ランプが点じてから既に二五分を経過している。エンジンは快調だが、燃料がいつ切れるかわからない。高知飛行場の着陸灯火を見たときは欣喜雀躍した。かくして辛うじて高知基地に着陸できたが、エンジンは着陸滑走中に燃料が切れて停止した。真に危機一髪であった。」

なお、第四独立飛行隊は、第三独立飛行隊の二機を併せ同日出撃することになっていった。重装備で離陸滑走距離が伸びる為、柏飛行場を使うことに

なった。ところが一三〇〇の出発時刻になっても出動可能機は二機に過ぎない。急な出動命令であったため、飛行機の整備が間に合わないのであった。一五〇〇過ぎ柏基地を出発した二機は硫黄島に向かったが、遂に同島を発見できず引き返した。二機は夜になって本土に到着したが、本州一帯が灯火管制下であり、全くの暗夜のため八街を発見できず、豊橋飛行場に不時着した。



サイパン島アスリート飛行場

## 第二次攻撃

下志津飛行師団では11月6日マリアナの偵察を行い、サイパンのアスリート飛行場及びアニアンの第一、第二飛行場の写真偵察に成功した。

この写真によればアスリート飛行場には、B-29が四〇機余りと多数の小型機—他の飛行場を合わせて小型機は二〇〇機余りがあった。なおアスリート飛行場の施設は驚くほど完備しており、滑走路の両側には立派な掩体が出ていて、B-29が一機ずつ格納されていた。テナアン島の南半部は雲におわれ偵察不能であったが、北飛行場には七〇機以上が認められた。在空中敵機は大型機二機だけで戦闘機の哨戒は認められなかった。

航空軍では11月6日夜第二次の攻撃を決行することになった。攻撃兵力は第二、第四独立飛行隊の出動可能の全力とし、第三独立飛行隊の二機を第四独立飛行隊に配属した。そして硫黄島離陸時刻を第二独立飛行隊は二二〇〇、第四独立飛行隊を二四〇〇と指定した。なお海軍の中攻隊が第二独立飛行隊より二時間前に発進する予定だった。

第二独立飛行隊は第一次攻撃の残存機四機、予備機一機計五機が、一〇三〇浜松を出発し、一四三〇ころ硫黄島

に進出した。快適な前進であった。硫黄島は第一次のときは強風の吹く寒い日であったが、今度は静穏な夕暮れであった。各機は着陸後ただちに燃料補給と爆装を行ない出発準備を完了した。

飛行隊は三機で、二二四五に硫黄島を離陸し、ほぼ、第一次と同様の経路を航進した。当日は日出〇五一四、薄明時間は25〜30分であった。攻撃は7日〇三二〇ころサイパン島西側海面に到達し、〇三二五から〇三五〇の間にわたってアスリート飛行場を攻撃した。

攻撃隊長は、サイパン島の直前で編隊を解いて攻撃命令を下し、アスリート飛行場に突撃、隊長機は第一次と同様に超低空の攻撃を敢行し掩体内のB-29を爆撃した。僚機二機も隊長機に続いた。アスリート飛行場は、この日もまた灯火管制を行わず、電灯が点されて煌々たる夜景であった。第一次

攻撃に比し各機とも落ち着いて全弾を投下し、銃砲撃も加えて帰途についてた。敵の対空砲火はこのときから連続猛烈な射撃を浴びてきた。わが方には相当の被弾を生じた。しかし致命的な損害はなかった。アスリート飛行場の設備はわが想像をはるかに越え、滑走路の両側に多くの立派な各個掩体が出ていて、中にはB-29が入っている

た。また掩体の外には小型機が並べた。また日本の基地では見られる完全設備の様相であった。

攻撃隊は「攻撃成功全機無事」を報告して帰途に着いた。各機は敵夜間戦闘機の追躡を受けたが回避し、全機が無事に〇七三〇ころ硫黄島に帰着した。戦果については各搭乗員の目撃を基礎とし、少なくとも一機以上を撃破したものと判定された。着陸後、機体の点検をしたところ隊長機は翼の日の丸と尾翼を打ち抜かれただけであったが、他のもう一機は胴体タンクその他に一〇三個の破痕があった。その大半は艦船から発射した榴弾の破片によるもので、三発は機関砲弾であった。

燃料補給後直ちに硫黄島を離陸して一路本土に向かい、全機無事浜松に帰着した。

第四独立飛行隊の第二次攻撃は、第一次と同様に柏飛行場から出撃した。第四独立飛行隊六機、第三独立飛行隊二機の予定であった。離陸時、第三独立飛行隊の皆川中尉機が場内に不時着して炎上する等の事故があり、予定より二時間以上遅れて出発した。硫黄島に到着したのは夕刻であった。

第四独立飛行隊は本来、偵察を使命とする司偵機をもって装備された部隊であり、爆撃を任務とする重爆の第二

独立飛行隊とは、編成当時から挺進攻撃の任務遂行に対する気構えが違っていた。そのうえに複座機で夜間洋上長距離を飛行することは相当無理であった。さらに長駆決死の進攻を敢行しても携行できる弾量は微々たるもので、敵に与えうる損害の程度も限られていた。

第四独立飛行隊は六機をもって硫黄島に進出したが、そのうちマリアナ攻撃に出動したのは四機であった。まず海軍の一式陸攻が先発し、次いで第二独立飛行隊の九七重が出発、最後が第四独立飛行隊であった。すなわち先行偵察機に続いて第一番機は〇〇〇五、第二番機は〇〇二五に離陸し、最後に池田春雄隊長機が〇〇三〇離陸して目標に向かった。

航進高度は各機ともサイパン島手前三〇〇軒くらいまでは、燃料節約のため三、〇〇〇〜四、〇〇〇米で航進し、それから高度五〇米の超低空接敵で北方から進入し、単機ごとに一航過「ター」弾攻撃、真直ぐ南へ抜けて一八〇度旋回して帰還の予定であった。もし北に帰れぬときはヤップに行くよう示されていた。各機は、ほぼ予定どおり航進し超低空で接敵した。加藤静男大尉(53期)機はテナアン北飛行場を、鉾田師団の伊葉秀雄中尉(56期)

を、鉾田師団の伊葉秀雄中尉(56期)

機はアスリート基地を攻撃して帰還したが、池田隊長機は未帰還となった。池田機の行動は明確でないが、加藤機が目撃したところによれば、輸送船らしい船から火があがったのを認めており、超低空攻撃中に敵弾を受けて最寄りの船に自爆したのではなからうかと推測された。

テニアン北飛行場を攻撃した加藤大尉は、その攻撃状況を基地帰還後、次のように語った。

「テニアン飛行場は折からの21日の月を背にいただったのであるが、敵の放った煙幕で地上施設はよくわからなかった。私は超低空で接敵し新鋭爆弾を滑走路とその両側に眠っている敵機、施設、人員、対空砲火、照空砲火陣地等にあたりかまわず投下した。サイパン水道の敵艦、地上砲火の射ちまくるポンポン砲が幾万発自分の周囲に炸裂したが、攻撃は瞬間的一航過で終わったので被弾は一発もなかった。爆撃を終わって振り返ると敵飛行場あたりは一面火の海で、全弾命中を確認し、皎々たる半月を仰いで帰還したときは、長い期間の苦勞が全部報われた爽快な気分であった。」

戦死した池田隊長は攻撃隊の士気について相当苦惱していたようであった。池田機は硫黄島離陸前にエンジン

が不調であった。攻撃に同行した加藤大尉は池田隊長の顔色を見て、「死を決心しているな」と直感したとのことである。

#### 新海、池田両隊に御嘉賞のお言葉

新海、池田両隊のマリアナ基地攻撃について、11月8日參謀総長が上奏した際、陛下から両隊に対し御嘉賞のお言葉を賜わった。教導航空軍司令官は同日、新海少佐および池田隊の加藤大尉を司令部に召致して状況を聴取し、夕刻、両隊長にお言葉を伝達した。菅原中将は、両隊長の深刻な労苦を察するとともに、携行燃料の増加、飛行機整備の完全等に、軍としてさらに努力を尽くさねばならぬことを深く反省した。特に攻撃隊指揮官の断行の意気が奏功の大きな鍵をなすと痛感したのであった。

#### 第二次攻撃以後の状況

偵察機の搜索によれば、B-29は11月6日サイパンに一五機、9日グアムに三〇機が在地していた。さらに二スコードロンが増強されつつあり、近くその兵力は七〇〇八〇機になるものと判断されていた。なお11月1日のB-29本土初偵察以来、12日までの昼間偵察は四回五機であり、本土方面に対する来襲が逐次活発化しようとする状況であった。小笠原方面においては11月

上旬から来襲が激増し、依然、嚴重な海上補給遮断を企図しており、またわが航空部隊がマリアナ攻撃を開始以來、敵の硫黄島に対する爆撃は強化され、11月11日には軽艦隊が来襲して、同島の飛行場を砲撃した。11月中旬の小笠原方面来襲は、18日までに二九回延一八〇機と依然活発であり、15日以降は父島を重点に船舶および港湾を攻撃した。なお18日にはP-38一〇機が初めて硫黄島に來襲した。

教導航空軍は、敵の基地建設およびB-29のマリアナ進出がきわめて迅速なため、11月6日の偵察成功後も、引き続き下志津教導飛行師団の司偵機による偵察に努めたが毎回天候に禍され、一部のほかは成功しなかった。

翻ってB-29の本土に対する行動は、12日の名古屋方面偵察以来しばらく鳴りをひそめていたが、11月24日B-29約七〇機をもって昼間大挙來襲し、帝都周辺を初爆撃した。教導航空軍は全般情勢上、11月22〜23日ころのサイパン攻撃を考慮していたが、司偵の偵察の相次ぐ失敗のため延期していた。時あたかもB-29の初空襲を迎え、直ちに翌25日の攻撃を決定した。

海軍は、準備の関係で攻撃を実施せず、第二独立飛行隊だけで攻撃することとなった。

#### 第三次攻撃

第二次攻撃後、第二独立飛行隊は浜松基地において、爾後の戦闘準備および訓練に日を送っていた。この間、パガン島に不時着した金光機の搭乗員も、海軍の潜水艦により帰還して戦力を加えた。11月24日、第三次サイパン攻撃の軍命令を受領した第二独立飛行隊は、新海隊長以下五機（うち一機は予備機）をもって25日硫黄島に前進しようとしたが、天候不良のため中止された。翌26日、隊長機以下五機は悪天候を冒して無事硫黄島に着いた。装備の点検、燃料の補給を敏速に終わった搭乗員は、飛行場の草むらに腰をおろして攻撃の時を待った。

やがて出発時刻となり、新海隊長は空中勤務者全員を集め、最後の注意と激励を与え、見送る人も少ない中を全機で離陸、基地上空を一周のち目標に向かい前進した。

新海隊長機以下三機は、第一次とほぼ同一航路を一路サイパンに向かって前進した。天候は比較的良好で順調に航進し、27日〇〇七〇〇一〇の間アスリート基地を攻撃した。今回は第二独立飛行隊だけの攻撃であったが、わが超低空接敵の利点である奇襲の効果を完全に収め、敵はわが攻撃終了後、はじめて灯火を消した状況であった。

各機は沈着に行動してアスリート基地南地南半部のB-29に対し、ほぼ高度一五〇米の低空爆撃および銃砲撃を行ない。搭乗員の目視しただけでも一二機以上の撃破炎上、三カ所の大火災を報じ、〇四五五全機無事に硫黄島に帰着した。

当時の状況を隊長機の爆撃将校であった森脇誠次少尉（のち中尉）昭和20・4・12日沖繩付近で戦死）は次のように手記している。（抜粋）  
「……眼下に黒々と横たはる大きな四発機、居た！ 思わず叫びそうになる。目指すB-29である。」

「僅かにヒタリ」と方向指導する余裕があった。「ヨソロ」と答へる湧谷中尉殿の気持と。ピッタリ意気が合つて、愛機の爆弾は目指す醜翼の頭上へ殺到する。投下！ あゝこの一瞬目をつぶって拝みたくなるような此の気持、だらしなく眠り続けて居るB-29の真上に全国民の誠心、全国民の怒りの爆弾がバラバラと落ちて行く痛快さ、固く握りしめる電鍵の何と頼母しいことか、地上すれすれに全速で飛ぶ愛機、青白く残月に照らされて輝くB-29の巨大な翼々。徹宵で工事を急ぐらしい自動車、今眼前で右往左往して逃げて居る。チラッと左を見る。ここにもゴロゴロB-29が居る。長々と

した滑走路、愛機はその南側にそって飛び続ける。後に投下したばかりの爆弾の破裂音が轟々たる爆音に混って響いている。

全弾投下し終るもホンの一瞬忽ちに、また海へ大きく右にひねって進路を再び北にとる。ふり返って見れば三条の大火柱が炎々と立ちのぼって居る。……ああ今ぞ見るB-29基地の姿、一面の噴火口と化したやうなこの飛行場、嬉しくて嬉しくて涙がとめどなく流れる……。」

新海部隊の感状上聞に達す 第二独立飛行隊はサイパン攻撃の功により、12月27日防衛総司令官から感状を授与され、さらに20年1月には上聞に達する栄に浴したのであった。

感 状

第二独立飛行隊 右ハ隊長陸軍少佐新海希典指揮ノ下ニ「マリアナ」方面敵航空基地攻撃ノ任ヲ受クルヤ周到ナル準備ヲ整ヘ凡ユル困難ヲ克服シ戦法ニ創意工夫ヲ廻ラシ烈々タル気魄ヲ以テ克ク数次ニ亘リ夜間長遠ナル渡洋進攻ヲ敢行シ「サイパン」島ニ於ケル敵B-29ノ基地ヲ急襲シテ多大ノ戦果ヲ収メ皇土防衛上至大ナル貢献ヲ致セリ 斯クノ如キハ隊長以下決死挺身皇軍重爆隊ノ真髓ヲ遺

憾ナク發揮セルモノニシテ其ノ武功拔群ナリト認ム  
依ッテ茲ニ感状ヲ授与ス  
昭和十九年十二月二十七日  
防衛総司令官 稔彦王

新海少佐は第二独立飛行隊に対する感状が上聞に達したばかりでなく、翌20年2月23日には単独拜謁の栄に浴した。

新海少佐の最後

第二独立飛行隊は、20年に入ると硫黄島中継が不可能になり、従ってマリヤナ爆撃ができなくなったので解散され、新海少佐は2月24日付で飛行第62戦隊長に転出した。戦隊は当時西筑波にあって練成中だったが、着任して数日後、海軍の大分飛行場に移って跳飛弾攻撃の訓練を行うことになった。

ここでも彼一流の猛烈な訓練で、搭乗員の伎倆はめきめき上達した。3月15日、その日も別府湾に停泊中の空母「鳳翔」を目標にして、三機編隊で跳飛弾攻撃訓練を実施していた。新海は編隊長機に搭乗し、海面すれすれに飛び、グイグイと編隊を引き廻してゆく。二回三回と攻撃を反復するうちに、僚機の一機が海面に接触し水しぶきを上げて海没した。松野少尉殉職、ほか

四名が負傷した。それでも訓練を中絶しない。

3月18日敵機動部隊現出の情報が入り、戦隊の属する戦闘飛行集団から、いきなり特攻機差出しを命じた。これに対し新海は「部隊はまだ伎倆未熟だから、特攻機を出せというなら戦隊長自ら行く」と主張したが、その意見は容れられず遂に三機を發進させることになった。

3月19日、浜松南方二〇〇キロの洋上にあるという機動部隊目がけて、特攻機三機が出撃した。新海は「お前達の最後を見届けてやる」と言って戦果確認機に乗り込むのであるが、「今日はどこまでも突込むよ」と出撃前に乾盃しながら言った。

敵機動部隊の推定位置附近で敵艦載機に遭遇したとき、特攻機は雲の中に突込んで敵機より遁れようとしたが、後上方を飛行していた戦隊長機だけは水平飛行を維持したままだった。特攻機三機のうち二機は雲に隠れて敵機の攻撃を避け、日没まで敵空母を探したが発見できず引返すのであるが、指揮官三浦中尉の眼に、一瞬映じた戦隊長機最後の姿がこの水平飛行だった。

## 平成 7 年度事業報告

平成 7 年度事業計画に基づき以下の通り事業を行った。

### 1. 慰霊事業

#### (1) 陸海軍特攻隊戦没者追悼集会

平成 7 年 3 月 31 日、靖国神社において陸海軍特攻隊戦没者合同慰霊祭を行った。

慰霊祭終了後、九段会館において当協会年次総会を開催し、引き続いて追悼集会を執り行なった。

参列者は政財界要人、来賓 51 名、遺族 75 名、会員 380 名併せて 506 名であった。

#### (2) 世田谷山観音寺・特攻平和観音年次法要

平成 7 年 9 月 23 日、世田谷山観音寺において同寺が主催する第 44 回年次法要に協賛した。

当日はトルコ大使館付武官ハッサン・ギュルゲン陸軍大佐夫妻の臨席を始め、来賓 47 名、遺族 56 名、会員 270 名併せて 373 名の参列があった。

#### (3) 全国各地慰霊事業への協賛

13 個所の行事に代表が参加した。

### 2. 慰霊碑建立事業

建設について物色したが継続課題となった。

### 3. その他の事業

#### (1) 機関紙「特攻」の発行

22 号、23 号、24 号、25 号を発行し、会員他に配布した。

#### (2) 「特別攻撃隊」販布状況

販布 134 在庫 439

#### (3) その他

1. 特攻隊に関する外国文献の収集、翻訳を担当する顧問として河内山 譲氏を選任した。

2. 遺族、会員その他からの情報により名簿の整備を行なった。

それとともに会員双互の情報交換に資した。

貸借対照表  
平成7年12月31日現在  
(第3年度)

(単位:円)

Table with 3 columns: Item (科目), Amount (金額), and Balance (残高). Rows include assets (資産) and liabilities (負債).

収支計算書  
平成7年1月1日から平成7年12月31日まで  
(第3年度)

(単位:円)

Table with 5 columns: Item (科目), Budget (予算), Actual (決算), Difference (差異), and Remarks (備考). Rows include income (収入) and expenses (支出).

注1 終戦50周年のため、各地での慰霊祭が多かったため。

注2 予算50万円は、慰霊祭事業費に充当した。

財産目録

平成7年12月31日現在

(単位:円)

Table with 3 columns: Item (科目), Amount (金額), and Balance (残高). Rows include assets (資産) and liabilities (負債).

※特設除帳役者慰霊平和祈念会士の平成7年度の計算書類について監査した、結果適正であることを認めます。

平成8年2月29日

監事

監事

阿部 洋彦  
小松 利光

平成七年度高額寄附者(芳名)

(但し百万円以上)

○六千六百万円

(京都)京セラ興産(株)殿

○老百萬円

(東京)榊養生堂殿、大穂孝子殿、真志田享殿

事務局便り

当協会事務局は事務局長木村元正、次長栗原 宏の2名で運営しております。

○執務時間 10時～17時

休憩時間 12時～13時

○休業は土曜、日曜並びに祝祭日、慰霊祭当日。

○業務内容

会費等収受他会計処理、会員名簿の管理、慰霊祭の準備、案内等慰霊事業業務

○会員関係諸資料、情報等の整理業務

○諸会議の準備、設営等

その他関連業務を処理しております。事務所は都心にしては閑静な場所にあります。何もお構いできませんが、おついでの折にお立ち寄り頂ければ幸いです。